高知県香南市発掘調査報告書　第１集

上岡北（かみおかきた）遺跡

―― 上岡地区農業集落排水緊急整備事業に伴う発掘調査報告書 ――

2008.12

香南市教育委員会

高知県香南市発掘調査報告書　第１集

上岡北（かみおかきた）遺跡

―― 上岡地区農業集落排水緊急整備事業に伴う発掘調査報告書 ――

2008.12

香南市教育委員会

上岡北遺跡遠景（南より）

堤防遺構検出状況

序

香南市は、平成18年3月に、赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村の5町村が手をつなぎ合併したまちです。青い空・碧い海・深い緑、そして実り豊かな大地と温暖な気候風土の恩恵を受け、交通の便も良く、早くから先人が歴史を創ってきた地域です。

旧5町村の各地域では、遺跡や古墳が多数確認されており、種々の埋蔵文化財や史跡・建造物、工芸品などの文化財が残っています。こうした地域の特性を活かしながら、「美しい水と緑と風に包まれ、元気で豊かに光るまち」をスローガンに、開発と文化が共存共栄する、住みやすく活力のあるまちづくりを目指して文化財行政を進めています。

今回の上岡北遺跡調査では、近世初めに造られた堤防を検出しました。これまでに行ってきた発掘調査の成果と併せて、物部川下流域の歴史を解明するためにも貴重な調査となりました。

この上岡北遺跡報告書が香南市の歴史を紐解く学術資料として、多くの研究者に活用されることはもちろんのこと、学校教育や生涯学習あるいは市民の方々に広く学んでいただき、多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれることを願っています。

最後になりましたが、上岡北遺跡調査にあたって、高知県教育委員会、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの調査員ならびに整理作業員の方々、調査にご協力をいただきました地元関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

今後とも、香南市の文化財行政に対する深いご理解とご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

平成20年11月

高知県香南市教育委員会

教育長　島　崎　隆　弘

例　言

1．本書は、平成12年度に野市町教育委員会が実施した農業集落排水緊急事業として処理場建設に伴う上岡北遺跡の発掘調査報告書である。平成18年3月1日に野市町は吉川村・赤岡町・香我美町・夜須町と町村合併を行い香南市となったため、香南市教育委員会が引き継ぎ本報告書を発行するものである。

2．上岡北遺跡は、高知県香南市野市町上岡2713番地他に所在する。

3．調査面積

調査対象面積　2,358㎡

調 査 面 積　1,400㎡

4．調査体制

平成12年度　野市町教育委員会　教　育　長　安岡　晋平
教 育 次 長　野島　昭男
生涯学習課長　公家　靖孝
生涯学習課長補佐　黒瀬　隆彦
学校教育課主事　吉永　次雄（調査事務・調査担当）
生 涯 学 習 課　更谷　大介（調査担当）

5．調査協力

高知県教育委員会 文化財保護室（現 高知県教育委員会 文化財課）

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

6．調査期間

平成12年4月6日～7月28日・10月3日～11月8日

7．本書の編集は更谷大介・溝渕真紀（香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係）が行った。執筆は第3章第2節1及び3を溝渕、その他を更谷が行った。

8．発掘調査に関しては、地元野市町上岡地区をはじめとした町内にお住まいの方々の全面的なご理解とご協力、ならびに温かいご支援を賜り調査を進めることができました。記して謝意を表します。

9．発掘調査の実施にあたっては、国土交通省物部川出張所（平成12年当時 建設省物部川出張所）のご理解とご協力を頂いた。記して謝意を表します。

10．発掘調査及び報告書作成に際しては、坂井秀弥（平成12年度 文化庁文化財保護部記念物課 文化財調査官）、北垣聰一郎（平成12年度 県立橿原考古学研究所員 文学博士）、畑　大介（平成12年度 帝京大学山梨文化財研究所 保存修復研究室 室長）、宅間一之（平成12年度 高知県立坂本龍馬記念館 学芸専門員）、出原恵三（平成12年度 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 班長）、浜田恵子（平成12年度 財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター 主任調査員）にご教示・ご指導を賜った。また、発掘調査の測量や図面作成等では、門脇　隆氏（平成12年度 高知県教育委員会 文化財保護室 埋蔵文化財班 社会教育主事）、絵図については門田由紀（安芸市立歴史民俗資料館 学芸員）のご協力を得た。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

11. 発掘現場作業に際しては、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）
発掘作業　貞岡重道・佐野宣重・河村美佐子・橿尾俊喜・新宅広子・岩河邦明
機械器具レンタル　株式会社 東部レントオール
重機オペレーター　清藤勝秀
航空測量　国際航業株式会社
旧堤防埋め戻し　三井工業株式会社
12. 遺物整理、報告書作成に際しては、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表します。
東村知子、岩崎佐枝（順不同、敬称略）
13. 本書に掲載した『物部川絵図』は安芸市立歴史民俗資料館、『土佐國古地図』は高知県立図書館が原本を所蔵している。
14. 本書では遺構の略号はSK（土坑）とし、現在の堤防を現堤防、出土した堤防を旧堤防と呼称する。
15. 掲載している平面図の方位は真北である。なお巻末の報告書抄録における経緯度については日本測地系の数値を使用している。
16. 出土遺物は「00－NKK」と注記し、関連図面・写真と共に香南市教育委員会で保管している。

高知県香南市の位置と上岡北遺跡の位置

本文目次

第１章　序説……1
　第１節　調査の概要……1
　第２節　調査の方法と経過……1

第２章　遺跡周辺の地理・歴史的環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……5

第３章　調査の成果……7
　第１節　基本層序……7
　第２節　検出遺構と遺物……8
　　１．上層の遺構と遺物……8
　　(1) 土坑（SK）……8
　　(2) 石列状遺構と石組遺構……22
　　(3) 上層の包含層出土遺物……24
　　２．中層の遺構と遺物……28
　　(1)堤防遺構……28
　　①堤防の部分名称について……28
　　②堤防遺構の出土状況……28
　　③旧堤防の調査経過……31
　　④堤防遺構の埋土と層序……31
　　⑤基底部の調査……32
　　⑥馬踏の調査……35
　　⑦法面の調査……41
　　⑧断面の調査……41
　　⑨現堤防と旧堤防の関係……43
　　⑩出土遺物……43
　　３．下層の遺構と遺物……46
　　(1) 土坑（SK）……46
　　(2) 下層の包含層出土遺物……48
第４章　まとめ……51
　　１．上岡北遺跡の遺構と遺物……51
　　２．絵図からみる旧堤防の築堤時期について……53
　　３．『長宗我部地検帳』と発掘調査からみる上岡地区の景観……57

挿図目次

第1図　上岡北遺跡　調査位置図……2
第2図　上岡北遺跡の位置と周辺の遺跡……4
第3図　土層断面図……9
第4図　上層の検出遺構全体図……11
第5図　SK1～SK3　平面及び断面図……12
第6図　SK4～SK8　平面及び断面図……13
第7図　SK9～SK14　平面及び断面図……15
第8図　SK15・SK16　平面及び断面図……17
第9図　SK17～SK19　平面及び断面図……19
第10図　SK20～SK22　平面及び断面図……20
第11図　SK23～SK28　平面及び断面図……21
第12図　石列1（1－1・1－2）平面及び断面図……23
第13図　石列1～石列3（石列1－3・石列2・石列3）平面及び断面図……25
第14図　石組遺構　平面図・立面図・横断図……26
第15図　上層の包含層出土遺物……27
第16図　堤防遺構の部分名称図……28
第17図　中層の検出遺構全体図……29
第18図　旧堤防出土状況　平面及び立面図……30
第19図　旧堤防　北壁（d－d'）土層断面図……33
第20図　旧堤防　A. 南側崩落部分の位置　平面図・立面図・横断図及び
　　B. 北側堤防上石列部分位置図……36
第21図　旧堤防　A. 南側崩落部分除去後　平面図・立面図・横断図……37
第22図　旧堤防　B. 北側堤防上石列部分　平面図・立面図・横断図……38
第23図　旧堤防　B. 北側堤防上石列部分除去後　平面図・立面図・横断図……39
第24図　旧堤防全体　平面図・立面図・横断図……40
第25図　旧堤防　北端西トレンチの調査位置と平面及び断面図……42
第26図　旧堤防　断面調査の位置と断面北側立面図及び出土遺物……44
第27図　現堤防と旧堤防　交差部位置及び立面図……45
第28図　下層の検出遺構全体図……47
第29図　SK29～SK31　平面及び断面図……48
第30図　SK30・SK31及び下層の包含層出土遺物……49
第31図　下層の包含層出土遺物……50
第32図　五藤家文書『物部川絵図』……54
第33図　『土佐國古地図』……56
第34図　上岡北遺跡周辺小字図……58
第35図　上岡地区下段の小字名とこれまでに実施した発掘調査箇所……60

表目次

表 1　遺物観察表（上層）…… 69
表 2　遺物観察表（中層）…… 69
表 3　遺物観察表（下層）…… 70

写真目次

図版1　調査前風景（南より。左は上岡山），調査前風景（北より。奥は上岡山）…… 73
図版2　SK19 検出状況，SK19 完掘状況，SK21 検出状況，SK21 完掘状況，SK3 土層断面，SK22 土層断面，
SK17・18 完掘状況，SK10・11・12・14・15・16 完掘状況 …… 74
図版3　石列 1−1（北より），石列 1−2（北より），石列 1−3（北より），石列 1−3（西より），
石列 3及び上坑検出状況，石組遺構（北より），石組遺構（西より。写真奥），石組遺構 …… 75
図版4　旧堤防出土状況と作業風景1，旧堤防出土状況と作業風景2 …… 76
図版5　現堤防馬踏（北より。奥は上岡山），現堤防裏法 …… 77
図版6　旧堤防裏法側全景，旧堤防 A.南側崩落部分（北より） …… 78
図版7　旧堤防 A.南側崩落部分（東より），旧堤防 A.南側崩落部分と堆積層 …… 79
図版8　現堤防と旧堤防交差部（裏法側），旧堤防南側 裏法下部分 …… 80
図版9　上岡北遺跡と屋辺部（真上より） …… 81
図版10　現堤防・石組遺構・旧堤防遠景（南上空より），現堤防・石組遺構・旧堤防全景（真上より）… 82
図版11　現堤防・石組遺構・旧堤防全景（東北上空より），
現堤防・石組遺構・旧堤防全景（東南上空より） …… 83
図版12　旧堤防（真上からの状況。北から南へ連続撮影①→⑥） …… 84
図版13　旧堤防（側面の状況。南から北へ連続撮影①→⑥） …… 85
図版14　旧堤防（断面の状況。西から東へ連続撮影①→④）
旧堤防（現堤防と旧堤防交差部の状況。南から北へ連続撮影⑤→⑥） …… 86
図版15　旧堤防全景（北より），旧堤防北側 馬踏の状況（調査前） …… 87
図版16　トレンチ調査の状況1，トレンチ調査の状況2，トレンチ調査の状況3，トレンチ調査の状況4，
断面調査の状況1，断面調査の状況2，断面調査（北面），断面調査（南面） …… 88
図版17　SK29 検出状況，SK29 完掘状況，SK31 検出状況，SK31 完掘状況，SK30 遺物検出状況，
SK30 遺物検出状況 …… 89
図版18　調査区北 北壁 西側，調査区北 北壁 旧堤防馬踏付近，調査区北 北壁 旧堤防裏法より東側，
調査区北 北壁，調査区北 東壁，調査区南 北壁と東壁，調査区南 東壁，調査区南 南壁 …… 90
図版19　旧堤防 断面調査時 遺物出土状況，旧堤防 断面調査時 出土遺物 …… 91
図版20　上層の包含層出土遺物 …… 92
図版21　上層の包含層出土遺物 …… 93
図版22　上層の包含層出土遺物 …… 94
図版23　SK30・SK31及び下層の包含層出土遺物 …… 95
図版24　SK30 出土遺物 …… 96

第1章 序 説

第1節 調査の概要

本遺跡は、高知県香南市野市町上岡2713番地他に所在する。上岡地区農業集落排水緊急事業として処理場建設が進められており、平成11年度に発掘調査を行った上岡遺跡が隣接している事や、周辺に重要な遺跡が確認されているため、当時の野市町教育委員会が平成12年4月6日～7月28日及び10月3日～11月8日に発掘調査を実施した。調査対象となったのは処理場建設予定部分と進入路である。(第1図)

当初は7月末日を以て調査を終了する予定であった。しかし、調査対象地西端において近世に築堤されたと考えられる堤防が出土し、野市町教育委員会、関係部局、野市町文化財保護審議会での協議の結果、出土した堤防は土中に保存する事になった。

ここで問題になったのは、保存する堤防の一部が計画されている処理場の基礎や浄化槽施工の影響を受ける事であった。しかしながら、関係部局のご協力と地元の方々のご理解を頂き保存する堤防に処理場がかからないよう、当初計画されていた範囲より東側に用地を広げ処理場建設の設計変更を行った。追加された部分については平成12年10月3日～11月8日に発掘調査を行った。

第2節 調査の方法と経過

調査対象面積は当初1,928㎡であったが、前記のとおり調査範囲拡大のため430㎡を追加し計2,358㎡、発掘調査面積は当初の1,100㎡に300㎡が加わり計1,400㎡となった。

まず、現在の田・畑面を重機及び人力を用いて掘削を行い遺構の検出を行う。標高海抜10.6m～10.8m前後で旧の田・畑跡を検出する。田・畑は東西に延びる石列で区画されており東西とも調査区外に延びている。この面で土坑28基を検出しており土坑内には川原石や砂が埋められている。出土遺物から現在の前段階に機能していた田・畑であると考えられる。遺構は調査区に任意で4m毎のグリッドを設定し、1/20を基本として平面図を作成した。

次に調査区西側に堤防遺構が出土する。調査区の西壁法面を緩やかな勾配にし建設省(現国土交通省)の許可を得て、現在の堤防際までの掘削作業を行い出土した堤防との関係を調査する。

出土した堤防は、記録保存の基礎資料を作成するため㈱国際航業に写真測量を委託し、平成12年7月7日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。

撮影後出土した堤防遺構の構造を確認することを目的に、断面調査や任意のグリッドによる調査及び馬踏の調査を行った。

調査区内の南側及び東側には、弥生時代・古代の遺物包含層が確認できその下に遺構面が確認できた。

最後に出土した堤防の保存にあたり、堤防保護のための土嚢設置および埋め戻しを行い、平成12年12月25日に現場作業を完了する。

第1図　上岡北遺跡　調査位置図

第２章　遺跡周辺の地理・歴史的環境

第１節　地理的環境

上岡北遺跡は平成18年３月に旧香美郡の香南五ヶ町村（赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村）が合併し誕生した香南市の野市町に位置している。

この合併により香南市は県内で４番目の人口を持つ自治体となり、面積126.49㎢、人口約34,000人を有する。（平成20年６月末日現在）

野市町は県中央部に広がる高知平野の東端に位置し、県下三大河川のひとつ物部川の下流域に発達した扇状地上にある。西は物部川をほぼ境として南国市、東は香南市香我美町と隣接し、北は烏ヶ森山系により香美市土佐山田町と分けられ、南は香南市吉川町・赤岡町と境を接しその南は太平洋をのぞむ。

また県都高知市と県東部を結ぶ国道55号線が東西に走っており、高知市より車で約30分と交通の便もよく、県都のベッドタウンとして人口も年々増加しており近年発展し続けている。

主要産業としては、近世、野中兼山らにより灌漑施設が整備され、かつては豊富な水を活かした米作の穀倉地帯であったが、現在は近郊型の園芸農業が盛んとなっている。

自然地理学的には、北東部に開楽山系の山岳地と物部川左岸側に分布する古期扇状地を呈する野市台地よりなっている。この開楽山系は秋葉山系と烏ヶ森山系の２つからなり野市町の約３分の１強の面積を占めている。

秋葉山系は町の北東、香南市香我美町の境にある開楽山（標高368.6m）より南西方向に高度を減じ、町のほぼ中心の三宝山（別名金剛山、標高265m）の南西方向で野市台地の下に沈む。その秋葉山系の北方に平行して烏ヶ森山系があり、同じく南西に向かって高度を減じて物部川にその山脚を浸食されている。

その山地の下に広がる野市台地は古期扇状地性の氾濫源であり、現在の市街地をのせ、海抜高度約40～10mと北から南へ高さを減じている。また、台地の西端部分は5mほどの段丘崖となって沖積平地となっている。上岡北遺跡はこの沖積平地上にあり海抜11.5m前後に立地している。これらの沖積平地や台地は、秋葉山系の西端部の三宝山の山麓部で遮られた物部川の堆積物が南東側へ向かって放出されたためできた扇状地性堆積物によって形成されたものである。

物部川が現在の流路を形成したのは近世以降のことであり、それ以前はいくつもの流路からなっていたが、中世になるとそれまで多数存在していた小流路の幾つかが堆積作用によりつまっていき、大きな自然堤防が形成され、近世になると両岸に堤防が築堤され現在の流路になったと考えられる。（第２図）

（国土地理院発行　1：50,000地形図　高知を使用）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	**上岡北遺跡**	**弥生・近世**	13	兎ヶ岩屋洞穴遺跡	弥生	25	宝鏡寺跡	中世
2	上岡遺跡	弥生・古代	14	アゴデン白岩洞跡	平安・中世	26	東野土居遺跡	古墳～平安
3	高田遺跡	平安	15	竹ノ内山古墳	古墳	27	大東遺跡	古墳～平安
4	下ノ洋遺跡	弥生～古代	16	笹ヶ峠遺跡	弥生	28	南中曽遺跡	弥生・古墳
5	北地遺跡	弥生～古代	17	大崎山古墳	古墳	29	野口遺跡	弥生～中世
6	西野遺跡群	弥生・古墳・平安	18	本村遺跡	弥生	30	田村遺跡群	縄文～近世
7	深淵遺跡	弥生～近世	19	大谷古墳	古墳	31	岩村遺跡群	弥生～中世
8	深淵北遺跡	弥生～中世	20	兎田柳ヶ本遺跡	弥生～古墳	32	ひびのき遺跡	弥生・古墳
9	父養寺古墳	古墳	21	豊後遺跡	弥生～中世	33	山田堰	近世
10	日吉山古墳群	古墳	22	下分遺崎遺跡	弥生	34	林田遺跡	弥生～中世
11	亀山窯跡	平安・中世	23	十万遺跡	弥生～中世	35	加茂遺跡	古墳～中世
12	小山谷古墳	古墳	24	香宗城跡	中世	36	町田堰東遺跡	縄文～中世

第2図　上岡北遺跡の位置と周辺の遺跡

第２節　歴史的環境

上岡北遺跡のある香南市野市町は、北部に山塊を背負い南部に平野部が開けている。西は一級河川物部川に隔てられ、東は香宗川がほぼ町境と重なっている。

物部川は野市町をはじめ高知平野東部の平野を潤している。近世以前においては現在よりも西部を流れ、下流に大小の自然堤防を形成しており、縄文時代後期以降の遺跡が立地している。その中でも田村遺跡[1]は弥生時代における南四国最大の拠点集落として知られており、上岡北遺跡から西へ約2kmの地点に位置している。その北部の上流右岸の香美市土佐山田町には、ひびのき遺跡[2]（弥生時代～古墳時代前期）、その対岸には林田遺跡[3]（弥生時代～中世）などがある。

東部を流れる香宗川流域では、縄文時代晩期の土坑が確認されている香南市香我美町の十万遺跡[4]や、弥生時代前期末の土器や多量の木器が出土した下分遠崎遺跡[5]などがある。

野市町内にも数多くの遺跡があり、弥生時代には集落数が飛躍的に増加し町内全域に分布している。特に西部を流れる物部川流域と、東部を流れる香宗川流域では増加が著しい。

物部川流域における弥生時代の遺跡は、国道55号線の南に位置する上岡山（標高33.9m）裾野で前期末の土器が積み重なって出土した上岡遺跡[6]（弥生時代・古代）や、北側には多くのガラス製品や鉄器を所持していた集落の下ノ坪遺跡[7]（弥生時代～古代）がある。その北側には深渕遺跡[8]（弥生時代～近世）などがあり、それらは物部川左岸の河岸段丘部に広く分布している。

香宗川流域における弥生時代の遺跡は、先に述べた下分遠崎遺跡と同一遺跡と考えられる曽我遺跡[9]があり、その北側聞楽山地の麓にはガラス製の勾玉等が出土した弥生時代中期の微高地に立地する本村遺跡[10]がある。聞楽山地には弥生時代中期末の笹ヶ峰遺跡や、土器・貝殻・獣骨・魚骨などが出土した弥生時代後期末の鬼ヶ岩屋洞穴遺跡もある。

古墳時代初頭の遺跡としては、物部川流域で深渕遺跡や西野遺跡群で竪穴住居等が確認されており、東部の香宗川流域では兎田柳ヶ本遺跡などが確認されている。古墳時代後期になると、物部川流域では住居内にカマドを有する竪穴住居が下ノ坪遺跡や深渕遺跡、西野遺跡群などで確認されているほか、古墳も聞楽山地に数多くみられ、特に竹ノ内山（清岡山）古墳は横穴式石室の円墳で、当時の原形に最も近い状態で残存しており、青銅環・直刀等が出土している。その他にも二次にわたる埋葬面が確認され、金環・馬具等多量の貴重な副葬品が出土した大谷古墳[11]をはじめ、小山谷古墳、大崎山古墳がある。また、北部の佐古地区にも日吉山古墳群や父養寺古墳等、そして今は消滅しているが上分古墳の存在等により地方豪族のいたことが推察される。

古代になると、物部川・香宗川両流域に官衙的性格をもつ遺跡がみられるようになる。物部川流域では、一辺約20ｍの大型建物や倉庫が規則正しく並び、全国的にも出土例の少ない四仙騎獣八稜鏡が出土した下ノ坪遺跡や、そこから約1km北には二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・硯・鉈尾等が出土した深渕遺跡、更に約500m北には緑釉陶器などが出土している深渕北遺跡[12]（古代末～中世前期）があり官衙関連の遺跡として確認されている。

また佐古地区の亀山にも窯跡があり、そこで作られた瓦は平安京大極殿、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていたことがわかっており、当時の野市町が中央と深いつながりを持ち重要な地であったことがうかがえる。

東部の香宗川流域では、緑釉陶器・墨書土器・円面硯・転用硯などが出土し中央との結びつきを想定させる遺物が出土している曽我遺跡がある。近接する香我美町の下分遠崎遺跡や十万遺跡と密接に関係しており官衙的性格をもつ遺跡であると考えられている。

中世になると、中原秋家・秋道が地頭となり香宗我部と名乗り勢力をふるった。しかし、関ヶ原合戦後、山内氏入国によりその所領を失い、その後の一国一城制でその居城である香宗城は取り壊された。現在は八幡社と土塁の一部を残すのみである。その南約200mに位置する香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡（県指定史跡）に歴代の墓と観音堂がある。（第2図）

参考・引用文献

（1）高知県教育委員会『田村遺跡群』高知県教育委員会　1986年
（2）岡本健児・廣田典夫『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会　1997年
（3）宅間一之・山本哲也・森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会　1985年
（4）高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988年
（5）高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査概報』香我美町教育委員会　1987年
高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査（Ⅰ）』香我美町教育委員会　1989年
出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査（Ⅱ）』香我美町教育委員会　1993年
（6）更谷大介・濱渕真紀『上岡遺跡』野市町教育委員会　2005年
（7）出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会　1997年
出原恵三・池澤俊幸・小松大洋『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会　1998年
更谷大介『下ノ坪遺跡Ⅲ』野市町教育委員会　2000年
（8）高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年
（9）高橋啓明・吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年
（10）坂本憲昭『本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1993年
（11）山本哲也『大谷古墳』（財）高知県文化財団　1991年
（12）佐竹　寛・吉成承三『深渕北遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1996年

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

調査区の北側東壁（a－a'間）、南側北壁（b－b'間）及び東壁（c－c'間）で基本層序を観察した。（第3・4図）

上岡北遺跡の基本層は1～25層である。1層～7層を上層とし、8～25層を中・下層として扱う。上層の遺構は3～7層間、下層の遺構は13層～17層間で検出している。

中層の遺構として扱う出土した堤防遺構は上層と下層の間に位置するが、築堤時の掘削や撹乱、後の氾濫などの影響によりどの段階のものであるか不明である。なお、堤防遺構埋土及び調査区北壁（d－d'間）の層序については後述する「2. 中層の遺構と遺物」で触れたい。

調査区の南側北壁で確認できた西への落ち込みは自然流路と考えられ、a～k層の11層に分層できる。西側は上岡山裾部になり流路全体の確認はできなかったが、13層の黒褐色シルト質～粘質土を切っているのが確認できた。

基本層序

1層：表土
2層：明黄褐色シルト質土
3層：淡灰色シルト質土に黄橙色シルト質土が混じる
4層：灰褐色シルト質土に濃茶褐色シルト質土が混じる
5層：灰茶褐色シルト質土
6層：灰褐色シルト質土に濃茶褐色シルト質土が混じる
7層：淡灰色シルト質土
8層：黄茶褐色シルト質土
9層：濃灰色シルト質土
10層：明黄橙色シルト質土
11層：灰黄色シルト質土
12層：淡茶灰色シルト質土
13層：黒褐色シルト質～粘質土
14層：黒茶褐色シルト質～粘質土
15層：濃茶褐色砂に1～10cm大の礫を含む
16層：茶灰褐色砂
17層：灰黄褐色シルト質土
18層：明橙色シルト質土
19層：灰黄色シルト質土に茶色シルト質土が混じる
20層：明灰黄色シルト質～砂質土
21層：灰色砂
22層：灰黄色砂
23層：暗灰茶色砂質土
24層：黄灰茶色粘性土に褐色シルト質土が混じる
25層：赤黒色砂に1～5cm大の礫を含む

第２節　検出遺構と遺物

１．上層の遺構と遺物

基本層3～7層を上層とし一括して扱う。調査地全体に近世以降の遺構が存在しており、土坑と石列状遺構、石組遺構を検出した。(第４図)

(1) 土坑 (SK)

SK1 (第5図)

調査区の南端にある。南と東は調査区外に延びており全体の形状規模は不明である。南北確認延長2.77m、東西確認延長2.08m、深さ83cmを測る。埋土は灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK2 (第5図)

調査区の南端、SK1の北西にある。西は調査区外に延びており全体の形状規模は不明である。南北確認延長2.17m、東西確認延長1.32m、深さ83cmを測る。基底面はほぼ水平で、断面は逆台形を呈しており壁は急に立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK3 (第5図)

調査区の南端、SK1の北隣にある。東は調査区外に延びており全体の規模は不明であるが、南北確認延長2.94m、東西確認延長1.03mの楕円形を呈すると考えられる。基底面は東へ向かうにしたがい深くなり、深さ約35～59cmを測る。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK4 (第6図)

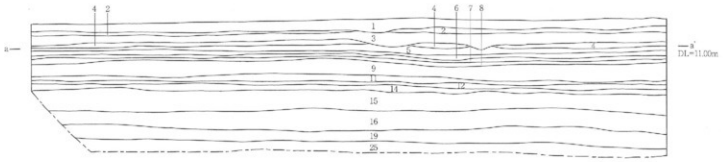
調査区の南、SK3の北にある。東は調査区外に延びており全体の形状規模は不明である。南北確認延長1.02m、東西確認延長0.62m、深さ17cmを測る。基底面はほぼ水平で、断面は逆台形状を呈する。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約5～15cm大の河原石が詰め込まれている。出土遺物はない。

SK5 (第6図)

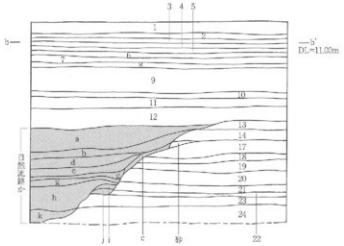
調査区の中央より南西にある。平面形は楕円形を呈し、長径2.08m、短径1.86m、深さ13cmを測る。基底面は平坦である。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK6 (第6図)

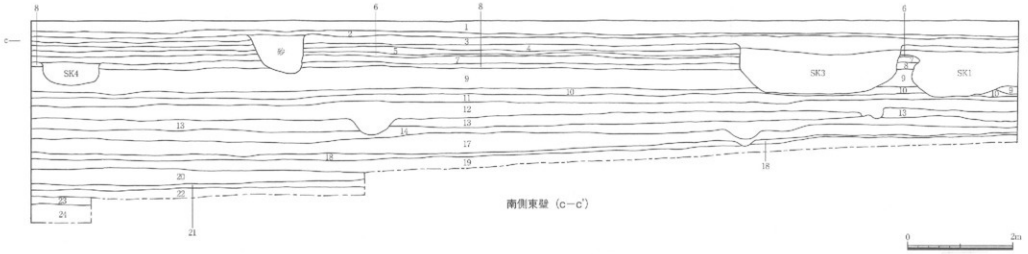
調査区の中央より南西、SK5の北西にある。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺2.96m、短辺1.79m、深さ12cmを測る。基底面は平坦面である。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。



北側東壁（a－a'）



南側北壁（b－b'）



南側東壁（c－c'）

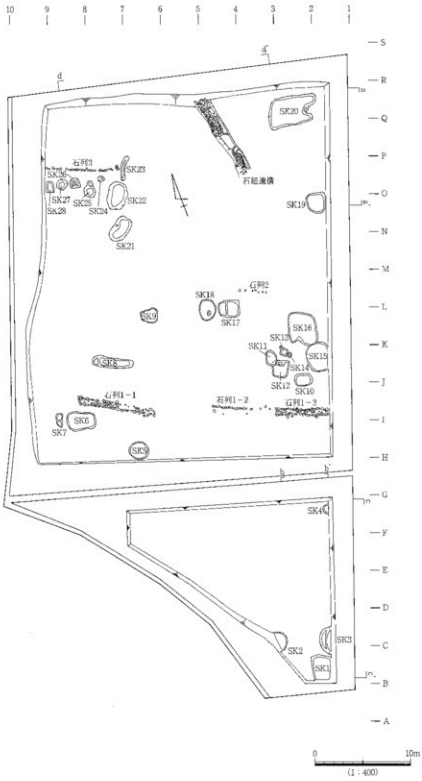
基本層序

1層：表土
2層：明黄褐色シルト質土
3層：淡灰色シルト質土に黄橙色シルト質土が混じる
4層：灰褐色シルト質土に濃茶褐色シルト質土が混じる
5層：灰茶褐色シルト質土
6層：灰褐色シルト質土に濃茶褐色シルト質土が混じる
7層：淡灰色シルト質土
8層：黄茶褐色シルト質土
9層：濃灰色シルト質土
10層：明黄橙色シルト質土
11層：灰黄色シルト質土
12層：淡茶灰色シルト質土
13層：黒褐色シルト質～粘質土
14層：黒茶褐色シルト質～砂質土
15層：濃茶褐色砂に1～10cm大の礫を含む
16層：茶灰褐色砂
17層：灰黄褐色シルト質土
18層：明橙色シルト質土
19層：灰黄色シルト質土に茶色シルト質土が混じる
20層：明灰黄色シルト質～砂質土
21層：灰色砂
22層：灰黄色砂
23層：褐灰茶色砂質土
24層：黄灰茶色砂質土に褐色シルト質土が混じる
25層：赤黒色砂に1～5cm大の礫を含む（旧河川跡）

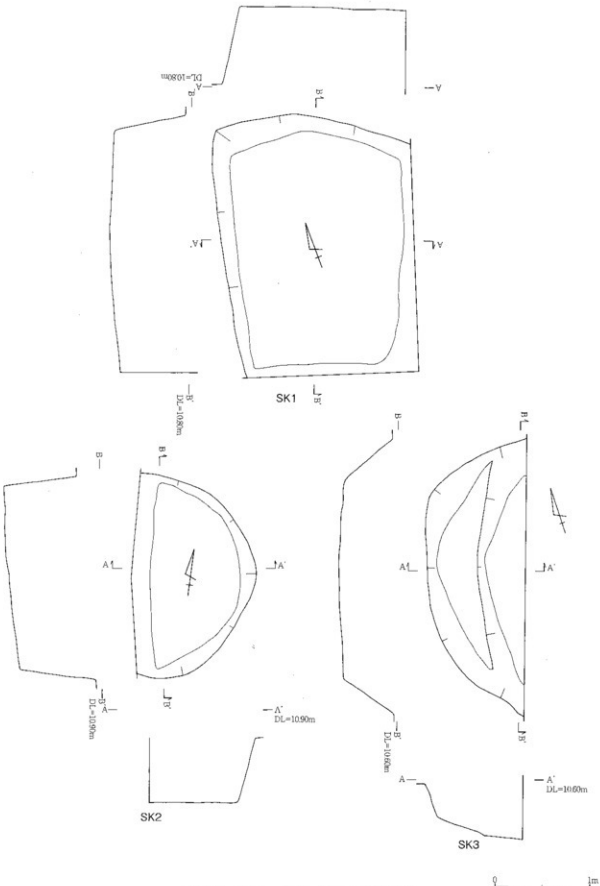
自然流路か

a層：淡茶灰色砂質土
b層：橙色シルト質土
c層：灰茶褐色粘質土
d層：にぶい黄橙色シルト質土
e層：灰茶色シルト質土
f層：灰茶褐色砂
g層：灰褐色粘質土に橙色シルト質土が混じる
h層：灰茶黒褐色粘質土
i層：明灰黄色砂
j層：灰色砂
k層：灰青色粘砂土

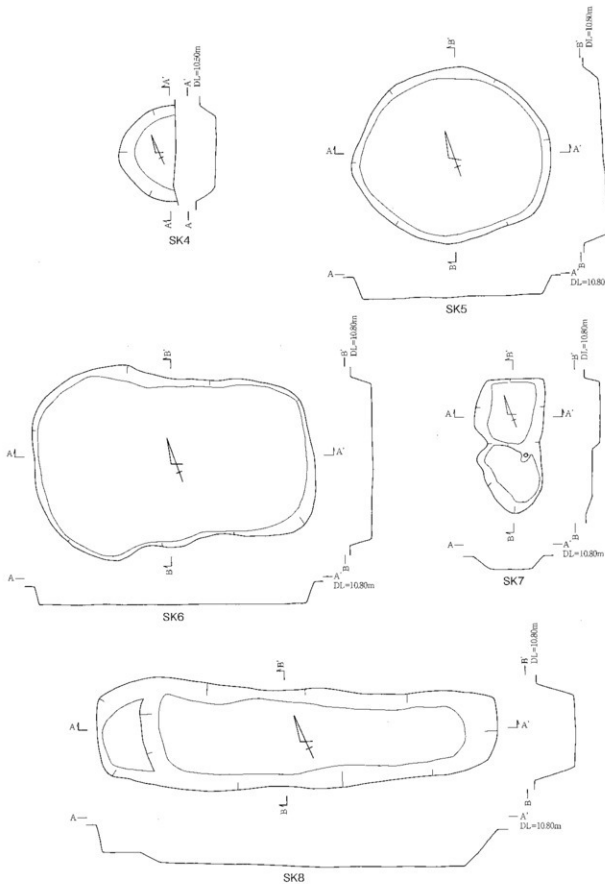
第3図　土層断面図



第４図　上層の検出遺構全体図



第5図　SK1～SK3　平面及び断面図



第6図　SK4～SK8　平面及び断面図

SK7（第6図）

調査区の中央より南西、SK6の西隣にある。平面形は不整形を呈し、長辺1.43m、短辺0.73m、深さ7～15cmを測り、北へ向かうにつれ深くなり2段に掘られている。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK8（第6図）

調査区の中央よりやや西にある。平面形は細長い溝状を呈し、長辺4.24m、短辺1.02m、深さ29cm～42cmと、西から東へ向かうにつれ深くなっている。壁は急に立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK9（第7図）

調査区の中央にある。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.79m、短径1.58m、深さ11cmを測る。基底面は平坦である。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK10（第7図）

調査区の中央より東南にある。平面形は楕円形を呈し、長径1.90m、短径1.28m、深さ32cmを測る。基底面はほぼ水平で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK11（第7図）

調査区の中央より東南にあり、南に接するSK12を切っている。平面形は楕円形を呈し、長径1.68m、短径1.18m、深さ34cmを測る。基底面はほぼ水平で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK12（第7図）

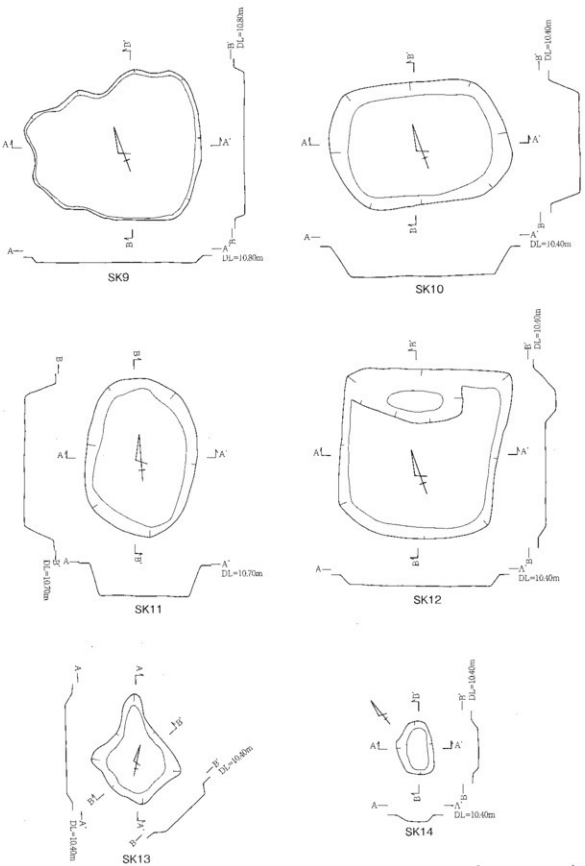
調査区の中央より東南にあり、北に接するSK11に切られている。平面形は隅丸方形を呈し、長辺（南北）1.79m、短辺（東西）1.67m、深さ12cmを測る。基底面はほぼ水平で、北側には深さ約22cmの浅い落ち込みがある。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK13（第7図）

調査区の中央より東南、SK11の東にある。平面形は不整形を呈し、長辺1.15m、短辺0.91m、深さ10cmを測る。断面は僅かに舟底状を呈する。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK14（第7図）

調査区の中央より東南、SK13の南に隣接する。平面形は楕円形を呈し、長径0.57m、短径0.38m、深さ5cmを測る。断面は舟底状を呈する。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。



第7図　SK9～SK14　平面及び断面図

SK15（第8図）

調査区の中央より東南にあり、北に接するSK16を切っている。東は調査区外に延びており全体の形状規模は不明である。南北確認延長3.15m、東西確認延長2.27m、深さ50cmを測る。基底面はほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK16（第8図）

調査区の中央より東南にあり、南に接するSK15に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、長径3.42m、短径2.93m、深さ35cmを測る。断面は逆台形状で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK17（第9図）

調査区のほぼ中央にある。平面形は隅丸方形を呈し、長辺2.29m、短辺1.78mを測る。基底面は西側にテラス状の段を有し、深さは最も深い部分で36cm、テラス部で4cmを測る。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。近世以降と思われる陶器細片（胴部）が1点出土しているが産地は不明である。

SK18（第9図）

調査区のほぼ中央、SK17の西隣にある。平面形は楕円形を呈し、長径2.17m、短径1.75m、深さ17cmを測る。基底面はほぼ水平をなすが中央部に深さ21cmの落ち込みがある。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物はない。

SK19（第9図）

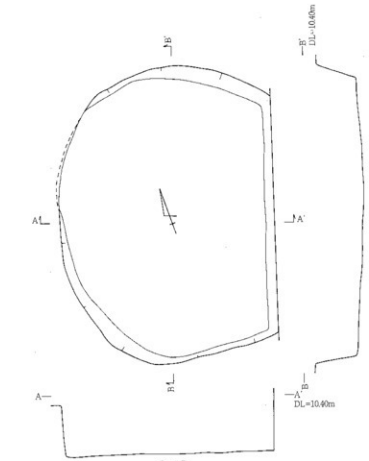
調査区の中央より北東にある。平面形は不整形を呈し、長辺2.07m、短辺2.00m、深さ21cmを測る。基底面は水平で、断面は逆台形状を呈す。埋土は茶灰色シルト質土。出土遺物は土師質土器細片1点と炭化植物1点で図示できるものはない。

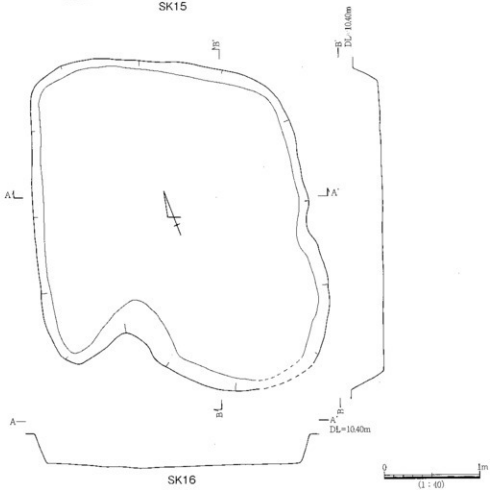
SK20（第10図）

調査区の北東隅にある。平面形は不整形を呈し、長辺4.83m、短辺3.08m、深さ45cmを測る。基底面はほぼ水平で、東には約20cmの浅い落ち込みがある。断面は台形状で、壁は直線的に立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK21（第10図）

調査区の中央より北にある。平面形は楕円形を呈し、長径2.83m、短径1.65m、深さ43cmを測る。基底面は西に段を有し南へ向かうにつれ僅かに高くなり、壁は緩めに立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。





第8図　SK15・SK16　平面及び断面図

SK22（第10図）

調査区の北西、SK21の北隣にある。平面形は不整楕円形を呈し、長径2.07m、短径2.89m、深さ64cmを測る。基底面は西へ向かうにしたがい深くなり、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK23（第11図）

調査区の北西、SK22の北隣にある。平面形は細長い溝状を呈し、長辺2.65m、短辺0.53m、深さ6cmを測る。断面は僅かに舟底状を呈する。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK24（第11図）

調査区の北西、SK23の西にある。平面形は円形を呈し、長径0.69m、短径0.67m、深さ10cmを測る。基底面はほぼ水平である。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK25（第11図）

調査区の北西、SK24の西隣にある。平面形は瓢箪形を呈し、長径方向1.66m、短径方向1.17mを測る。基底面は北側にテラス状の段を有し、深さは最も深い部分で38cm、テラス部で8cmを測る。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK26（第11図）

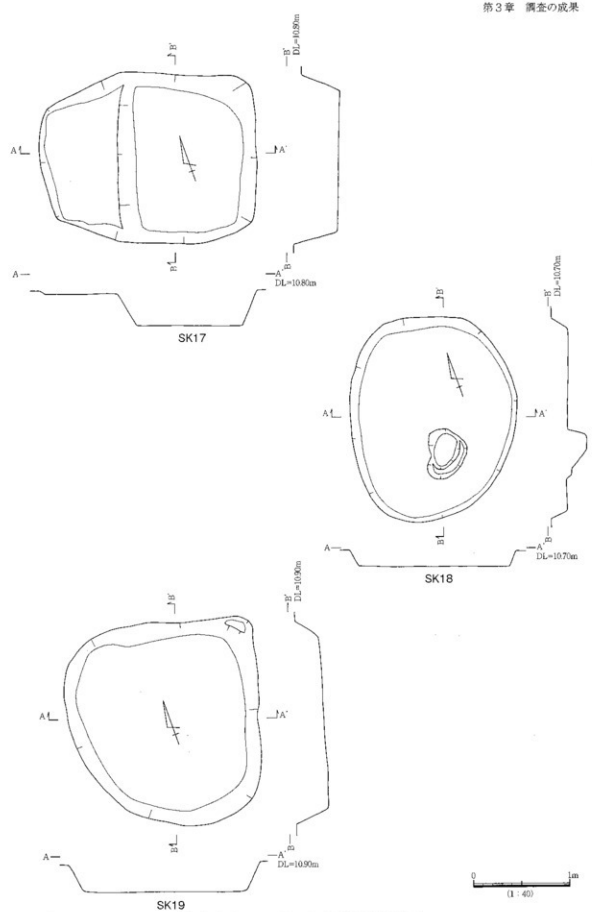
調査区の北西、SK25の西隣にある。平面形は楕円形を呈し、長径1.09m、短径0.95mを測る。基底面は段をもち南には約10cmの落ち込みがある。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。

SK27（第11図）

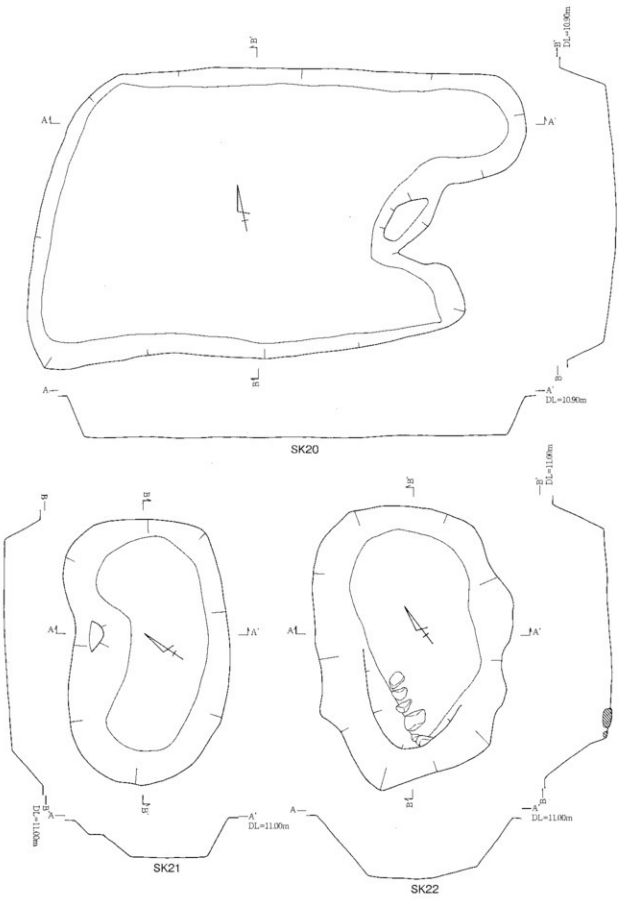
調査区の北西、SK26の西隣にある。平面形は楕円形を呈し、長径1.14m、短径0.99m、深さ23cmを測る。基底面は平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物は型紙摺の印判皿と思われる陶器細片（口縁部）1点のみである。

SK28（第11図）

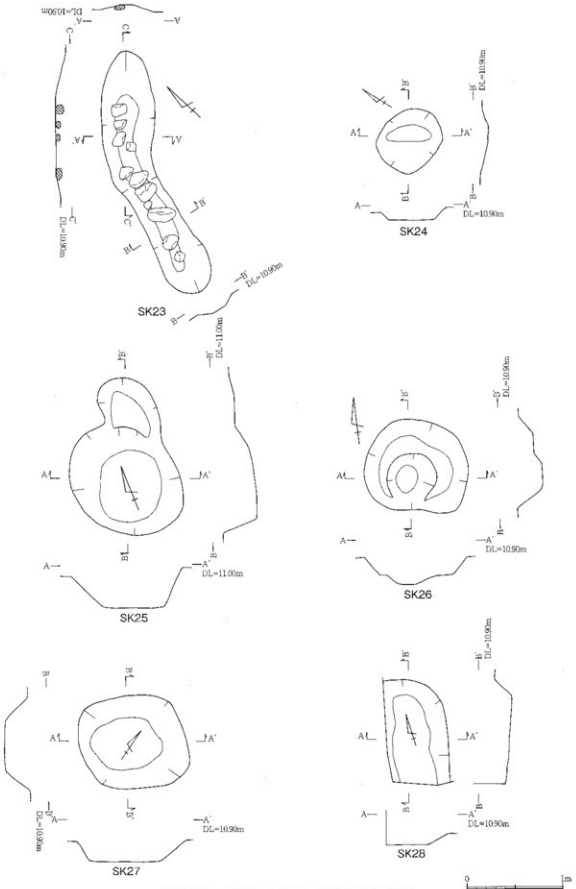
調査区の北西端、SK27の西隣にある。南と西は調査区外に延びており全体の形状規模は不明であるが、南北確認延長1.01m、東西確認延長0.65m、深さ16cmを測る。基底面はほぼ水平をなしている。埋土は茶灰色シルト質～砂質土に約20cm大の河原石が詰め込まれる。出土遺物はない。



第9図　SK17～SK19　平面及び断面図



第10図　SK20～SK22　平面及び断面図



第11図　SK23～SK28　平面及び断面図

(2) 石列状遺構と石組遺構

近代、或いは近世の田畑の区画を形成する畦と推測される遺構3列（以下、石列と略す）と、川の氾濫を防ぐために積み上げられたと推測できる石組遺構1列が検出できた。

石列1～3は、旧田畑の区画を形成しているが、石組遺構は区画を形成している石列とは異なり、時期的には少し古い。現在から逆に遡ってみると、まず現在の田畑があり、近世或いは近代に石列1～3で田畑が区画されていた時期があり、その前段階に自然堤防を利用し積み上げた南北に延びる石組遺構がある。

石列1（第12・13図）

調査区中央南にある。1－1、1－2、1－3と分けて調査を行ったが同一の石列であろう。石列1－1～1－3の長軸方向はN－67°－Wである。巨視的にみるとほぼ直線的に東西方向へ延びており、確認延長約27mで東側は調査区外に延びている。近代或いは近世の田畑の区画を形成する畦であると考えられる。

1－1（第12図）

石列1の西側部分である。確認できた範囲で東西7.3m、幅0.8mを測る。約5～40cm大の河原石が均等に並んでいる。出土遺物はない。

1－2（第12図）

石列1の中央部分で1－1と1－3の間にある。確認できた範囲で東西6.4m、幅0.5mを測る。約10～30cm大の河原石が並ぶ。出土遺物はない。

1－3（第13図）

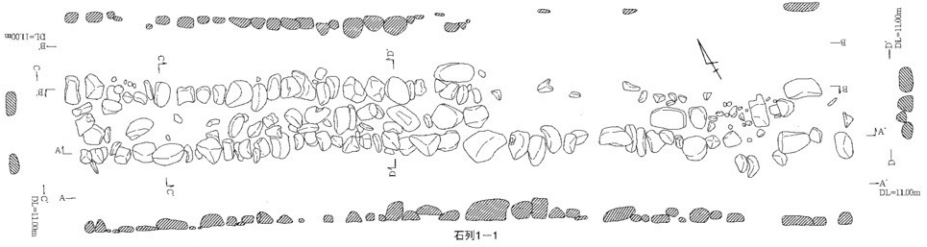
石列1の東側部分である。東は調査区外へ延びる。確認できた範囲で東西6.0m、幅1.0mを測る。約10～30cm大の河原石が並ぶ。出土遺物はない。

石列2（第13図）

調査区ほぼ中央東にある。長軸方向はN－69°－Wで直線的に東西方向に延びる。確認できた範囲で東西3.0m、幅0.4mを測る。約5～20cm大の河原石8個が、ほぼ均等に1列に並ぶ。出土遺物はない。近代或いは近世の田畑の区画を形成する畦であると考えられる。

石列3（第13図）

調査区北西にある。西は調査区外へ延びており東はSK23に切られる。長軸方向はN－69°－Wで直線的に東西方向に延びており、確認できた範囲は東西5.7m、幅0.5mを測る。約20cm大の河原石がほぼ1列に並ぶ。出土遺物はない。近代或いは近世の田畑の区画を形成する畦であると考えられる。



第12図　石列1（1－1・1－2）平面及び断面図

石組遺構（第14図）

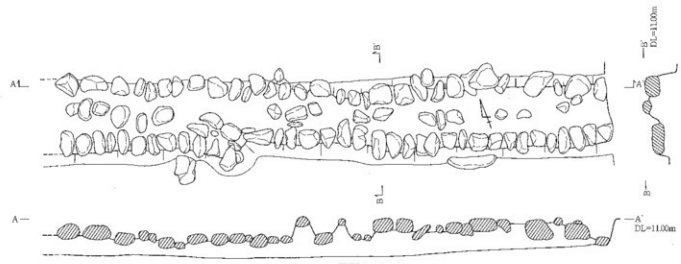
調査区北にある。長軸方向はN－11°－Wで南北に延びており、確認できた範囲で南北10.5m、幅1.3mを測り、東部分は段状になっている。全体中央部に3.1m程、石のない空間が認められるがその意味は不明である。出土遺物も皆無で時期や性格は明確ではないが、遺構西側に砂礫層と砂層の堆積が確認できるため氾濫を防ぐために設けられた施設ではないかと思われ、上層の石列遺構や土坑よりは古い時期に造られていると考えられる。

(3) 上層の包含層出土遺物

上層の包含層より、染付の碗（1・2・5・6・7）、鉢（11・12）、陶器の碗（3・4）、皿（8・9）、徳利（10）、鉢（14）、甕（15）、土師質のカマド（13）が出土している。（第15図）

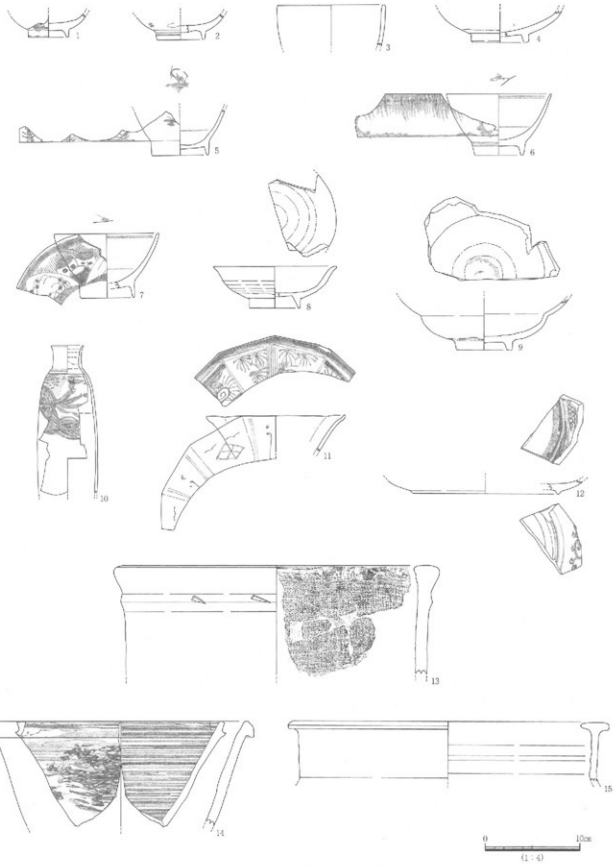
1は肥前系の染付碗である。外面の高台脇にややあせた呉須で草木文を描く。白濁色の透明釉が畳付以外全面に施釉されている。胎土は灰色を呈する。2は肥前産の染付丸形碗で18世紀。高台外面、高台脇に圏線。呉須は暗い青色に発色する。胎土は灰色を呈する。3は肥前系丸形碗で17世紀後半～18世紀代。浅黄色を帯びる半透明の灰釉を施釉し、0.5～1㎜前後の細かい貫入がみられる。胎土は淡黄色でやや粗い。4は瀬戸の碗である。内面は全面、外面は高台から0.9～1.3㎝にまで施釉されている。内底2ヶ所に目跡が残る。胎土は淡黄色を呈する。5は肥前系の染付広東形碗で19世紀～幕末。外面に蝶と植物を描く。呉須は青色に発色する。胎土は白色を呈する。6は肥前系の染付広東形碗で1780年代～19世紀中葉。外面に雨降り文。高台外面に2条の圏線。内面は口縁と見込みに圏線、中央に寿を描く。呉須は青灰色に発色する。胎土は白色を呈する。7は肥前系の染付広東形碗で18世紀末～19世紀。内面は口縁と見込みに圏線、外面に植物が描かれる。呉須は淡・濃青色に発色する。胎土は白色を呈する。8は能茶山産の皿である。灰釉は灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。外面の高台、高台脇は無釉。胎土は灰白色を呈する。9は肥前産内野山窯の皿で18世紀。灰釉はオリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明釉。内底は蛇ノ目釉剥ぎを施し、中央に重ね焼きの跡が認められる。外面は高台付近まで施釉。削り出しによる高台を有し、断面は台形状を呈する。胎土は灰白色を呈する。10は徳利である。外面は白濁釉と鉄釉を掛け分け、赤・黒の上絵付けによる文様を筆書きする。内面は口縁部から頸部にかけてのみ白濁釉を施釉する。口縁部内外面に気泡がみられる。胎土は白色を呈する。11は肥前系の染付八角鉢で19世紀代。内面は竹文と植物、外面は田・鳥が描かれている。呉須はあせている。胎土は白色を呈する。12は肥前産の染付皿で18世紀。胎土は白色を呈する。13はカマドか。下限は明治時代と考えられる。内面に布目圧痕、外面はヨコナデを施す。外面の口縁下に三角形状の圧痕文が認められる。内外面ともに煤ける。胎土はにぶい橙色を呈する。14は能茶山産の鉢で19世紀。白化粧土のハケ目を施す。胎土は灰黄色で、焼成は堅致である。15は鉄釉の甕である。口縁がT字に拡張する。胎土は白色でやや粗い。

その他、弥生土器胴部12点、土師質土器口縁部2点、底部1点、須恵器甕胴部2点、近世陶磁器口縁部24点、胴部51点、底部12点、瓦14点、石製品1点、鉄製品15点の合計120点が出土している。（第15図）



第13図　石列1～石列3（石列1－3・石列2・石列3）平面及び断面図

第14図　石組遺構　平面図・立面図・横断図



第15図　上層の包含層出土遺物

2．中層の遺構と遺物

(1) 堤防遺構

①堤防の部分名称について

堤防の部分の名称については第16図のとおりとする。堤防断面を台形に例えると、上辺は現在天端とも呼ばれているが「馬踏」と呼び、西側を流れる物部川に面する斜辺を「表法」、その反対側の斜辺を「裏法」と呼び、底辺は「敷」と呼称する。

第16図　堤防遺構の部分名称図

②堤防遺構の出土状況

平成12年4月24日午後、調査区北西部の物部川左岸部に存在する現在の堤防の東側に、この堤防より古い時期に機能していたと考えられる堤防の馬踏を検出した。

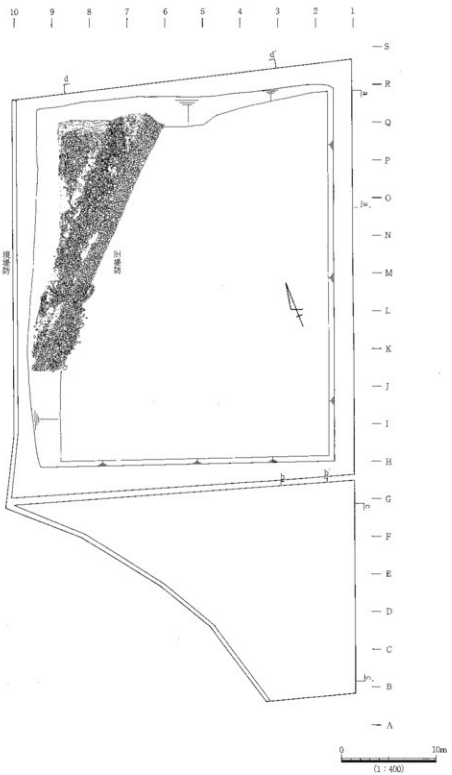
以下、現在の堤防を「現堤防」、出土した堤防を「旧堤防」と呼称する。(第17・18図)

旧堤防の主軸はN－45°－Eで北東から南西方向に延びており、現堤防の長軸方向は調査区付近でN－19°－Eで北から南へ延びている。

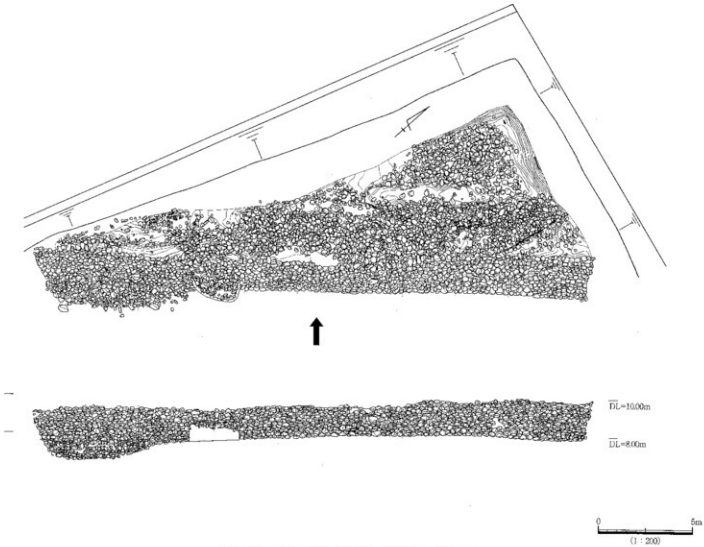
旧堤防の北東部は調査区外に延び、南西部は現堤防と交差してその下を通り調査区外に延びている。

旧堤防の確認延長は約29.2m、高さは約1.7～2.0m、馬踏の幅は約1.8～2.0mを測る。また、現堤防の馬踏から旧堤防馬踏までの高低差は約2.1～2.7mを測り旧堤防最下部の標高は約8.0mを測る。

旧堤防の埋土（埋没土）及び堤防石積み表面から、近世或いは近代の陶器類・鉄製品等が出土しているが、堤防築堤後に混入したものであろう。



第17図　中層の検出遺構全体図



第18図　旧堤防出土状況　平面及び立面図

③旧堤防の調査経過

旧堤防を検出してから後の大まかな調査経過を述べていく。

まず、旧堤防の調査を行うにあたり、調査範囲西側の境界に現堤防が存在することと、旧堤防が現堤防の下で交差しているため、掘削時に現堤防や土の圧力などにより、現堤防及び調査区西側の壁法面が崩落する可能性が想定された。

この事について当時の建設省（現国土交通省）と協議し、現堤防の現状を保つことを条件とし十分に余裕を持った法面角度をつけ調査を行うということで、旧堤防と現堤防が交わる部分及び調査範囲西側の現堤防際まで調査の許可を得た。

小型バックホーや土運搬車等を現場に投入し、重機オペレーター3人体制で西壁法面を緩やかな勾配にして土砂等の崩落を防ぎ、かつ安全に調査が行えるように努めた。

次に、旧堤防南側の馬踏上の石が東側裏法側に崩落した箇所の調査と裏法基底部の検出を行う。併せて旧堤防南側の現堤防と交わる部分まで掘削し、現堤防の裏法根石部分を一部検出して旧堤防との関係を調査した。

ここで調査区内における旧堤防全体の検出が完了し、検出状況を空中写真測量の手法により、記録保存の基礎資料を作成するため㈱国際航業に写真測量を委託する。現地でラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を測量法・建設省（現国土交通省）公共測量作業規程・文化財保護法・その他関係法令・規程等に準拠して実施した。

測量後、旧堤防表法側の崩れている部分の調査や馬踏の調査を行った。また、旧堤防の内部構造を確認することを目的に断面調査を１箇所行うと同時に、旧堤防の北側西にグリッドを設定し表法側の調査を行った。

旧堤防は協議の結果、埋め戻しを行い保存することとなり、旧堤防保護のための土嚢設置および埋め戻しを三井工業株式会社に委託し旧堤防の保存を行った。

④堤防遺構の埋土と層序

調査区北側の壁（d－d'間）において堆積及び氾濫の状況、旧堤防埋土についての確認を行う。各堆積層の内容は次の通りである。（第19図）

北壁の東側1～9層及び11・12・14・19・25層は自然堆積の層で、15・16層は氾濫によるものである。

1層は現在の耕作土であり、西側の一部で1層直下に攪乱が認められた。前述した「1. 上層の遺構と遺物」本文では割愛したが、上層の調査時に調査区北側西の表土直下で意識的に区画された砂礫の範囲が確認された。現堤防築堤の際に攪乱されたものか、耕作地をならすために人工的に入れられたものかは不明である。

西側に確認できる氾濫1は基本層の6層段階で確認でき、旧堤防の表法側に沿う形で西側に向けて深く落ち込み調査区外に続いている。

次に、氾濫2の砂層と砂礫層が西に向かって堆積している。氾濫2の西側は氾濫1により切られている。氾濫2は基本層の8層段階での氾濫を示しており、この氾濫の後に石組遺構が造られたと考

えられる。

旧堤防の埋土（埋没土）となっている土の堆積状況は、馬踏の上にa層：茶褐色シルト質土と砂礫が堆積しており、表法側は氾濫1により砂礫が堆積しa層：茶褐色シルト質土を切っている。

裏法側では12層の堆積土が確認でき、上から順にb層：灰青色粘砂土に橙色シルトがブロック状に混じった土が約10cm、c層：灰茶褐色シルト質土が約10cm、d層：黄灰色シルト質土が約16cm、e層：淡灰茶褐色シルト質～砂が約20cm、f層：黄色粘土が約10cm、g層：灰色砂に黄色砂混じりが約6cm、h層：灰赤色シルト～粘質土が約16cm、i層：赤茶色粘土が約14cm、j層：灰褐色シルト質土が約18cm、k層：灰茶褐色シルト～粘質土に黄色シルト質土混じった土が約26cm、l層：灰茶褐色シルト質土が約20cm、m層：青色粘砂土が約22cmの順で堆積しているが、旧堤防の埋土となる堆積層からの遺物は確認できない。

この堆積層の下に25層（赤黒色砂に1～5cm大の礫）が確認でき旧堤防は25層の上、もしくは25層を少し掘り下げて築堤されている。25層は北壁の東側で標高9.26mを測り西に向かって若干高く上がっており、中央部付近では標高9.44mを測る。そこから西方向に約56cmほど落ち込んでおり、更に約74cmほど西への落ち込みがみられる。それより西は標高8.1mほどでほぼ平坦になり旧堤防裏法根石部に突き当たっている。

こうした状況から、調査区周辺は西を流れる物部川の氾濫を受ける立地にあったことが窺える。

⑤基底部の調査

旧堤防の石積み最下部である基底部の調査を行う。（第18図）

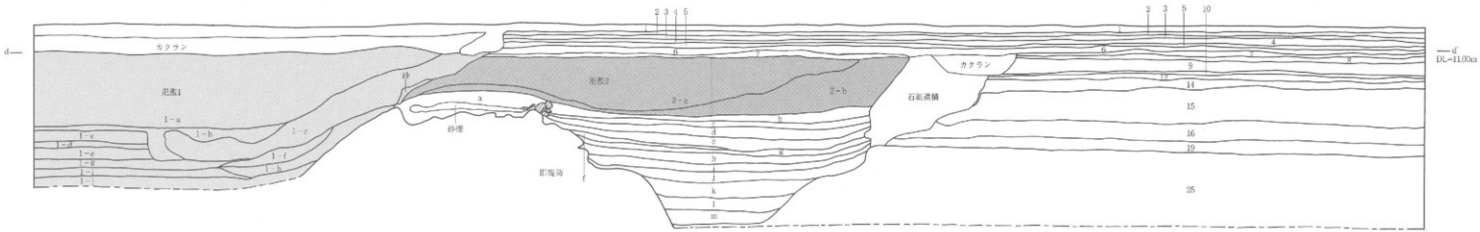
表法側の基底部は、河川の氾濫などによる影響で馬踏等の石が表法側に崩れていると同時に全体の約1/2が調査区外であることなどから検出段階での調査は行えず、後述する「⑦法面の調査」及び「⑧断面の調査」で一部報告する。

裏法側は、はっきりと検出できており石積み最下部である基底部の確認ができた。長軸方向での確認延長は28.2mを測り土台となっている礫層（25層：赤黒色砂に1～5cm大の礫）を少し掘り下げて石を積み上げている。

北側の基底部を基準に土台となる礫層をみてみる。

まず、検出している旧堤防北側の基底部は標高約8.0mを測り、南へ約2.7mの地点から緩やかに礫層が高くなっている。約4.3mの地点で標高8.2m前後を測り緩やかに南に下がっていく。約14.8mの地点で標高8.0mになり17.0m付近まで続く。そこから緩やかに南に下がっていき21.9m地点で標高7.7mを測る。その地点からは急に落ち込んでおり、25.0m地点で標高6.7m、南端部の28.2m地点も標高6.7mとなっている。

このように21.9m付近より礫層（25層：赤黒色砂に1～5cm大の礫）が落ち込んでいるが、この落ち込みに河原石が隙間なく入り込んでいる。石の状況をみてみると、堤防のように意識して積んだ石の配列ではなく、堤防を築堤する際に基底部の高さを合わせるために河原石を放り込んで土台とし、その上に堤防本体を築堤したものと考えられる。基底部に木類等の土どめや枠等は確認できない。



基本層序

1層：表土
2層：明黄褐色シルト質土
3層：淡灰色シルト質土に黄橙色シルト質土が混じる
4層：灰褐色シルト質土に濃茶褐色シルト質土が混じる
5層：灰茶褐色シルト質土
6層：灰褐色シルト質土に淡茶褐色シルト質土が混じる
7層：淡灰色シルト質土
8層：黄茶褐色シルト質土
9層：濃灰色シルト質土
10層：明黄橙色シルト質土
11層：灰黄色シルト質土
12層：淡茶灰色シルト質土
13層：黒褐色シルト質～粘質土
14層：黒茶褐色シルト質～粘質土
15層：濃茶褐色砂に1～10cm大の礫を含む
16層：茶灰褐色砂
17層：灰黄褐色シルト質土
18層：明橙色シルト質土
19層：灰黄色シルト質土に茶色シルト質土が混じる
20層：明灰黄色シルト質～砂質土
21層：灰色砂
22層：灰黄色砂
23層：暗灰茶色砂質土
24層：黄灰茶色粘性土に褐色シルト質土が混じる
25層：赤黒色砂に1～5cm大の礫を含む

氾濫1

1－a層：灰色砂礫に1～20cm大の礫を含む
1－b層：灰青色粘砂土に茶褐色シルト質土が混じる
1－c層：灰茶色砂～シルト質土に橙色シルト質土が混じる
1－d層：灰茶色砂
1－e層：灰茶色砂～シルト質土に橙色シルト質土が混じる
1－f層：礫層
1－g層：青色粘砂土と橙色砂の互層堆積
1－h層：灰茶褐色シルト質土
1－i層：赤茶色粘質土
1－j層：灰茶褐色シルト質土

氾濫2

2－a層：砂礫層
2－b層：砂層

堤防埋没土

a層：茶褐色シルト質土
b層：灰青色粘砂土に橙色シルト質土がブロック状に混じる
c層：灰茶褐色シルト質土
d層：黄灰色シルト質土
e層：淡灰茶褐色シルト質～砂
f層：黄色粘質土
g層：灰色砂に黄色砂が混じる
h層：灰赤色シルト質～粘質土
i層：赤茶色粘質土
j層：灰褐色シルト質土
k層：灰茶褐色シルト質～粘質土に黄色シルト質土が混じる
l層：灰茶褐色シルト質土
m層：灰青色粘砂土

第19図　旧堤防　北壁の土層断面図

⑥馬踏の調査

旧堤防の石積み最上部である馬踏の調査を行う。

旧堤防の長軸方向はN－45°－Eで北東から南西方向に延びており、確認延長は29.7mを測る。現堤防（調査区西側での長軸方向はN－19°－E）の下を通り、南西部は調査区外に延び北東部分についても調査区外に延びている。

馬踏の西側表法側は河川の氾濫などによって部分的に圧力が加わっており、西側へ崩落している石などがみられる。

裏法側でも南側で一部崩落した箇所がみられるが（以下、A. 南側崩落部分とする）上面に積まれている馬踏は巨視的にみて揃った状態で比較的良好な状態で残っている。

A. 南側崩落部分の馬踏から崩落した石の下には青色砂質～シルト質土と粘質土が互層堆積しており、堤防裏法側に青色土が堆積した後の段階で崩落したことを示している。（第20・21図）

崩れた石及びその下に堆積している土は上から順に、1層：茶褐色シルト質土に橙色シルト質土がブロック状に混じる、2層：灰青色シルト質土、3層：灰青色粘質土、4層：灰色砂に灰青色シルト質土が混じる、5層：灰青色シルト質土に灰色砂が少量混じる、6層：灰青色シルト質土～粘質土、7層：灰青色シルト質土～砂質土となっており、2層から7層まで砂質～シルト質土と粘質土の互層堆積している。その下が8層：赤褐色シルト質土～砂に1～3cm大の礫が混じる（基本層の25層）となっている。

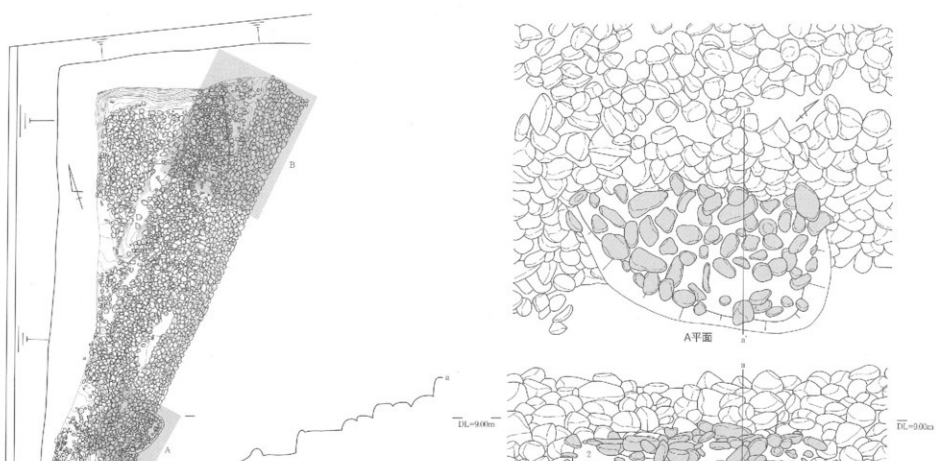
馬踏の幅は、表法側が河川の氾濫などによる影響で西に崩れており正確には計測できなかったが、確認部で約1.7～2.0mを測る。

旧堤防北側の馬踏上に三角状の範囲で石列が乗っていた箇所が確認できた。（以下、B. 北側堤防上石列部分とする）（第20・22図）

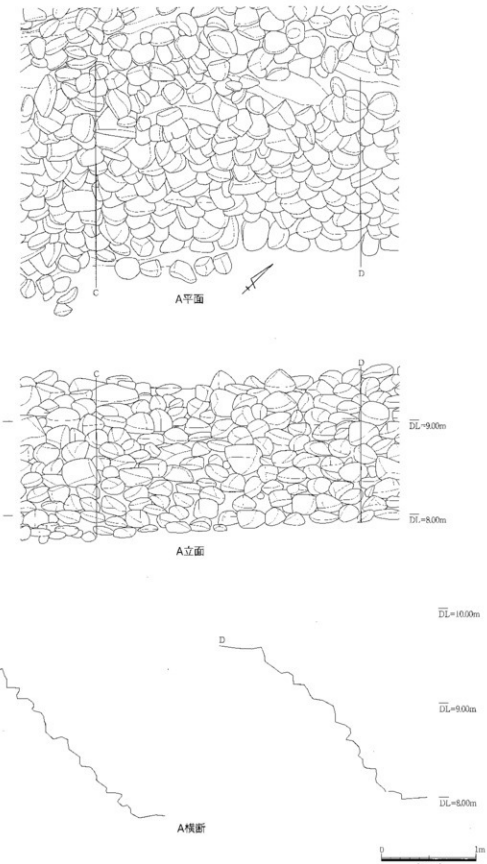
北側壁を基準に東西幅約2.7mの一辺、旧堤防馬踏の裏法側上に平行に約5.2mの一辺 、そこから北壁に向かって約 4.6m の一辺で囲まれた三角形の範囲で石列が認められ、この石列は北の調査区外へ延びている。石は25～30cm大の河原石で、石列と馬踏の間には砂礫層が10cm前後と茶褐色砂～シルト質土が10cm前後堆積している。

B. 北側堤防上石列部分は航空写真測量後に除去した。（第23図）

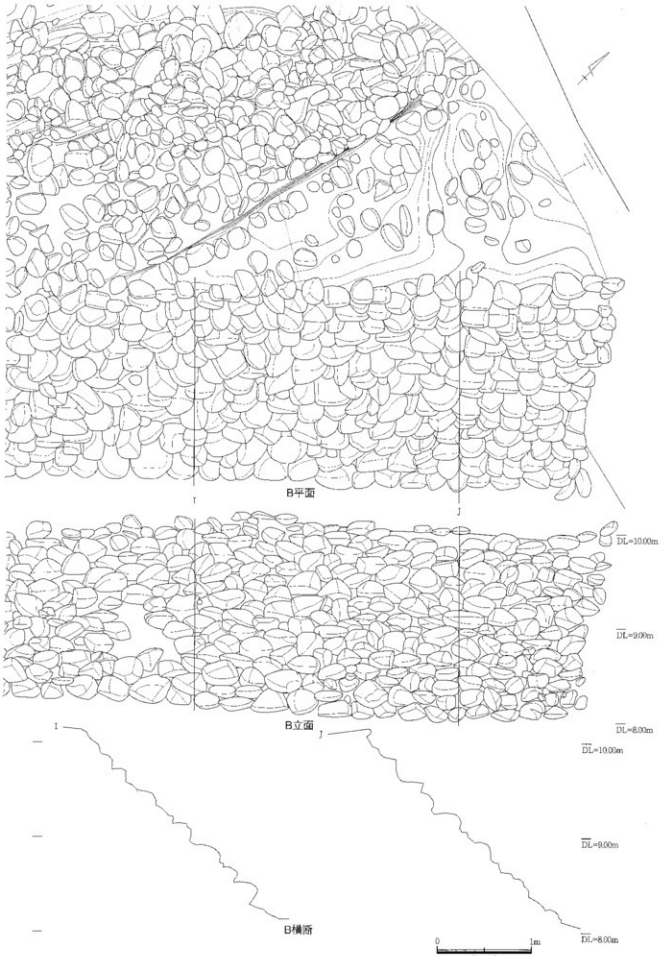
旧堤防北側、馬踏の標高は約9.9mで南へ約15.0mの地点で標高9.8m、約29.7mの地点で9.3mを測り、馬踏は南に向かって僅かに傾斜し高さは低くなっている。上流側から下流側に向かって標高が下がっており、この地周辺全体の標高も上流側から下流側へ下がっているのでそれに合わせて勾配がつけられている。（第24図）



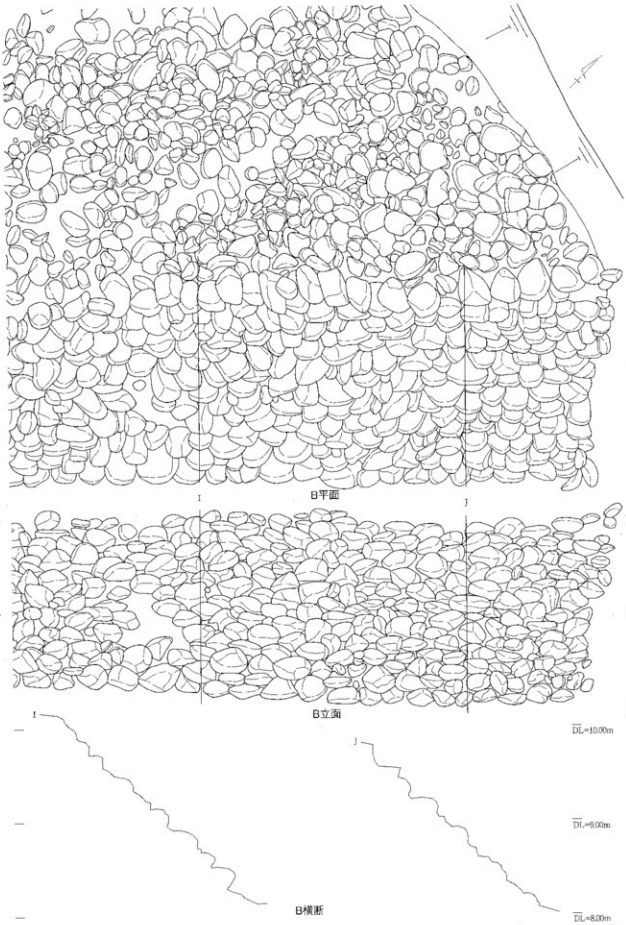
第20図　旧堤防　A. 南側崩落部分の位置　平面図・立面図・横断図及びB. 北側堤防上石列部分位置図



第21図　旧堤防　A. 南側崩落部分除去後　平面図・立面図・横断図



第22図　旧堤防　B. 北側堤防上石列部分　平面図・立面図・横断図



第23図　旧堤防　B. 北側堤防上石列部分除去後　平面図・立面図・横断図

第24図　旧堤防全体　平面図・立面図・横断図

⑦法面の調査

旧堤防の表法及び裏法面の調査を行う。

表法側の調査可能な範囲は、旧堤防馬踏の北西端部より西へ約5.5m、南へ約11.5mを２辺とし、それをつなぐ調査地西端ライン約7.7mの三角形の範囲で、西側は現堤防が境になっており、限られた範囲での調査となった。

また、表法側は河川の氾濫などによる影響で崩れているため、表法の下裾部分は堆まっており全体の姿は確認できない。この崩れは西に続いているが調査区外のため不明である。

ここで表法面の状況を観察するために任意でトレンチを設定し、崩れた石を除去しながら掘り下げを行う。(第25図) 崩れた石の下には1～10cm大の小礫が層になっており、その下には砂層が西から東に落ち込む形で堆積している。その下には旧堤防裏法裾の基底部と同じ礫層 (25層：赤黒色砂に1～5cm大の礫) が確認できた。

表法の基底部については法面が崩れており、裏法のようにはっきりと確認が出来ないが、砂礫層の上にある石が表法の基底部ではないかと考えられる。

堆積状況から見ると、砂層の所までは水がきていたものと考えられ、その後、河川の氾濫などの影響によって、表法側に積まれた石が西側に崩れた (すべり落ちた) と考えられる。

裏法側は、前述したとおりA.南側崩落部分がみられたが、石は巨視的にみて整然と積まれている。

旧堤防裏法に任意で約２m間隔、10ヶ所の地点で法角度を計測した結果、南側から順にA・B・C地点で48°、D地点で45°、E地点で44°、F・G地点で43°、H・I地点で47°、J地点で46°である。裏法の勾配は43～48°の間で、約45°前後を基調として築堤されたものと考えられる。(第24図)

⑧断面の調査

旧堤防の内部構造を確認することを目的に断面調査を１箇所行う。(第26図)

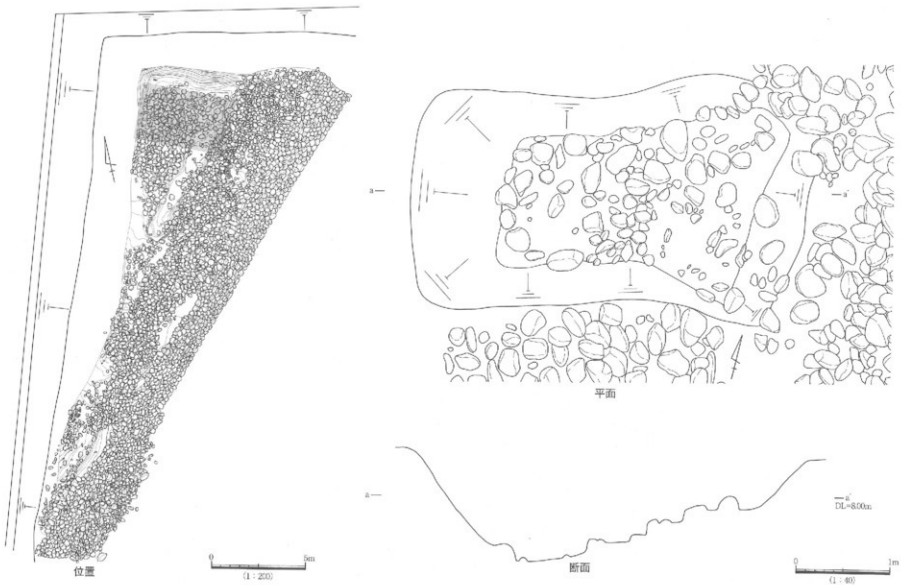
当初は旧堤防北端部の壁に沿わせて断面を入れる予定であったが、旧堤防の向きと調査区の角度関係により、旧堤防に直交する形で断面調査設定を行った。

また北側西に設定したトレンチと今回の断面調査が連続して行えるように設定した。

調査は馬踏、表法、裏法表面の石から除去していく。馬踏表面の石は1～30cm大の河原石で西側と表法は崩れている。

裏法表面の石は1～50cm大の河原石が積まれており、最下部にある50cm前後の石が基底部と思われ、断面調査箇所の裏法角度は44°を測る。

堤防表面の石を除去後、堤防内部の調査を行う。内部には20～40cm大の河原石の隙間に茶褐色粘質～シルト質土が入っており、河原石とともに締め固められている。



第25図　旧堤防　北側西トレンチの調査位置と平面及び断面図

⑨現堤防と旧堤防の関係

旧堤防の南側、現堤防と交わる部分まで掘削をする。併せて現堤防の裏法基底部を検出し旧堤防との関係を調査した。(第27図)

現堤防の長軸方向は真北より東へ19°、旧堤防の長軸方向は真北より東へ45°振っている。現堤防と旧堤防の角度差は26°で、現堤防から東へ26°方向に旧堤防は延びている。

検出している旧堤防は、北端より東南方向約25m付近で調査区西壁に突き当たり現堤防の下を通り交わっている。

交わった箇所を、現堤防と旧堤防の関係等を調査する目的で建設省(現国土交通省)の許可を得て約4mの区間のみ現堤防の裏法側を調査した。

調査地付近で現堤防の裏法は、調査当時約90cm土中に埋まっている状態であった。まず、埋まっている土を除去し現堤防裏法の全貌を検出した。

現堤防の馬踏の標高は12.25m前後を測り、馬踏から基底部までの高さは約1.9m、その内の90cmは土中にあった。

現堤防の約4mの調査区間内において、中央から南にかけて斜めに走る石の断層(ずれ)が認められた。この断層を境に堤防の石積み方法が異なっており、北側の石積みより南側の石積みが奥に数cmほど入り込んでいる。

断層の北側及び上部の石積みは20～30cm大の河原石で構成されており、石の大きさや積み方は、現堤防の全体と同じように見受けられるが、断層より南側の裏法約1/2下側は20～25cm大の河原石を積んだ石積みの間に7～10cm大の小石が詰められている。北側の石積みより積まれた時期は古い。調査の制約上、現堤防の調査はこの1箇所のみで全容は不明ではあるが、現堤防の中でも積み直しが行われており、災害等によって崩壊し積み直されたものと考えられる。

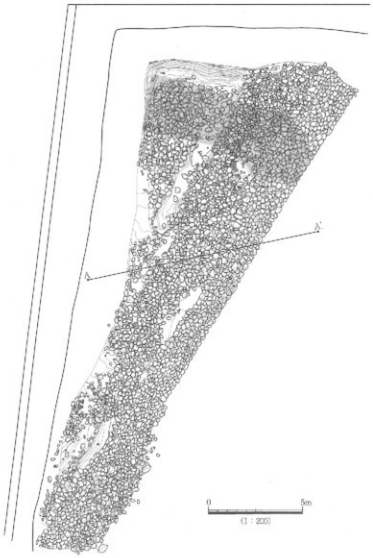
現堤防の基底部下には茶灰色シルト質土の層が若干堆積しており、その下には基礎に使われたと考えられる石(河原石)が敷かれてあった。

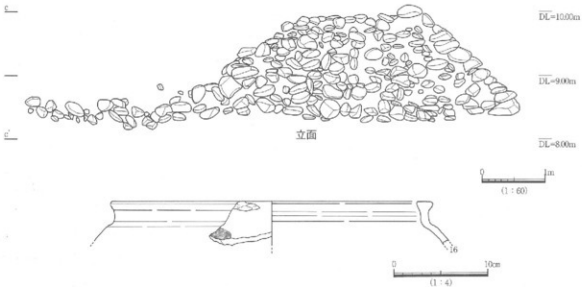
その下に旧堤防の馬踏があり、旧堤防南端部で裏法の最上部が標高9.3m、最下部が標高6.7mを測り高低差は2.6mである。しかし、旧堤防自体の高さは1.7m前後であり、最下部より約90cm～1mほどは旧堤防を築堤する際、基底部(根石)の高さを合わせるために河原石を放り込んで土台としたものと思われる。

⑩出土遺物

旧堤防内部から近世陶器片1点が出土した。(第26図)

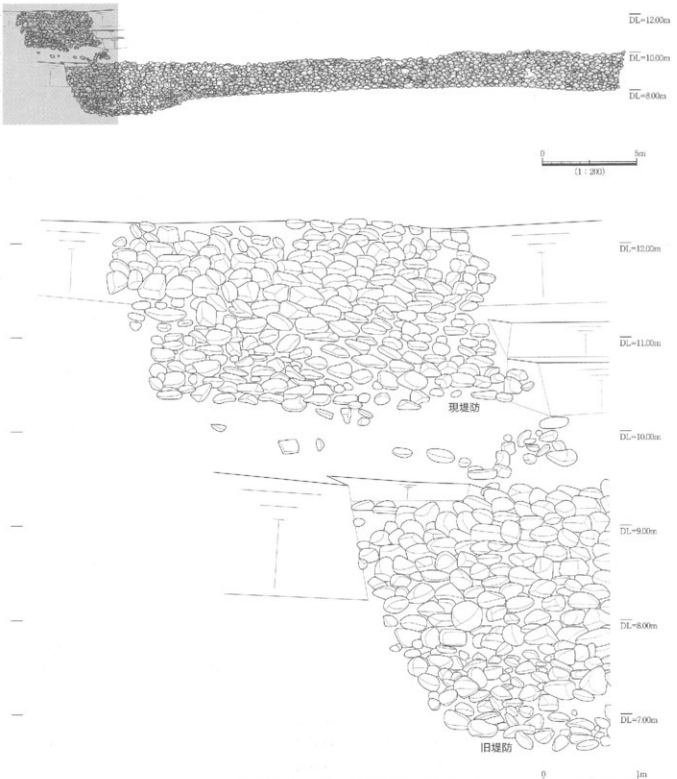
馬踏表面の石を除去し、内部の堤防構築土及び石を少し除去した標高9.622mで遺物が出土する。出土した近世陶器は鉄釉甕(16)で、口縁部は内外に拡張し、口唇部に一条の沈線が認められる。胎土は鉱物粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。口唇部及び内面に灰釉、外面に鉄釉が施され、外面の一部に灰釉がみられる。施釉方法の鉄釉と木灰釉のかけ分けや口縁から頸部にかけての形状は丹波製品に似ているが、胎土中に黒色細粒が多く含まれている点が丹波製品と違っている。近世の陶器であることには間違いないが正確な生産地と時期比定は難しい。





第26図　旧堤防　断面調査の位置と断面北側立面図及び出土遺物

また、旧堤防埋土（埋没土）及び堤防石積み表面からは、弥生土器胴部10点、底部１点、土師質土器口縁部２点、胴部16点、底部２点、近世陶磁器口縁部５点、胴部３点、底部３点、瓦４点、石製品２点、鉄製品15点、植物１点の合計64点が出土している。



第27図　現堤防と旧堤防　交差部位置及び立面図

3．下層の遺構と遺物

基本層13層～17層を下層とし一括して扱う。(第28図)

調査地南西部分は、上岡山裾部にあたるため山際までの調査はできなかった。しかし北壁の土層断面（b－b'）でみてみると、自然流路と考えられる落ち込みが確認できる。この自然流路は13層（黒褐色粘質土）を切っており、流路の深さ約1.8m、幅は未確認であるが西の上岡山裾付近に続くものと考えられる。遺物は確認できなかった。

調査地南東部分は、弥生時代の遺物包含層である13層（黒褐色粘質土）及び14層（黒茶褐色粘質土）の堆積が確認できる。その下17層（灰黄色シルト質土）に弥生時代・古代の遺構検出面があり土坑等が確認できた。調査地南側に隣接する上岡遺跡（弥生時代・古代）の遺構と同一の様相を呈している。

調査地北西部分は、現堤防や旧堤防付近にあたり、近世による堤防築堤などの影響を受け下層の遺構は残っていない。また、北東部分も河川の氾濫と考えられる15層（礫層）、16層（砂層）の影響で下層の遺構は残っていない。

(1) 土坑（SK）

SK29（第29図）

調査区の南、東端にある。東は調査区外に延び全体の形状は不明であるが、南北確認延長0.79m、東西確認延長1.21mを測る。深さは28cm前後で、南西に長軸方向0.39m、短軸方向0.31m、深さ10cmの落ち込みが認められる。埋土は灰色粘質土に橙色シルト質土がブロック状に混じる。

遺物は落ち込み部より、須恵器胴部細片1点、石製品1点が出土し図示できるものはないが時期は古代と考えられる。

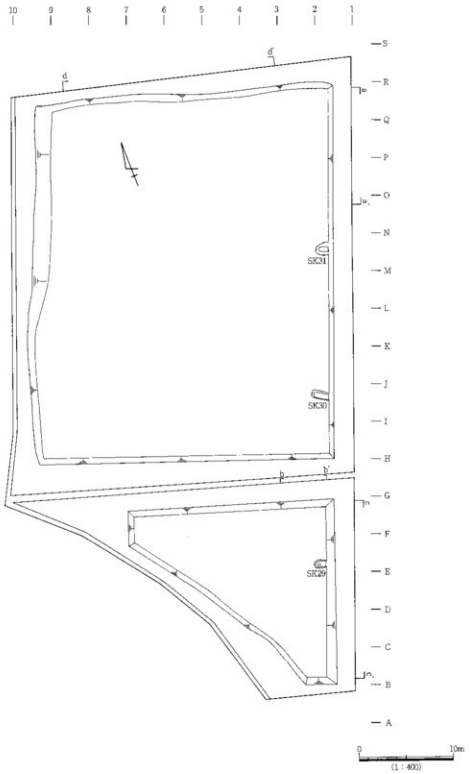
SK30（第29・30図）

調査区の中央より南、東端にある。東は調査区外に延び全体の形状は不明であるが、南北確認延長0.81m、東西確認延長1.85mを測る。深さは39cmで、断面は逆台形状を呈す。埋土は濃黒褐色粘質土。

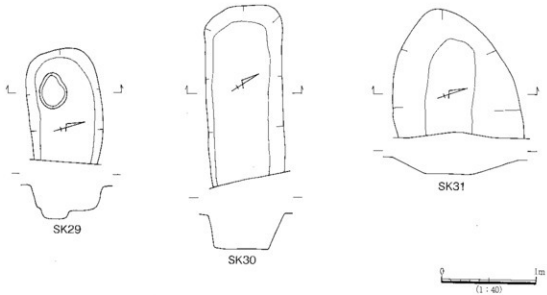
遺物は弥生土器壷（18～21・28）、弥生土器甕（22～27）、石製品1点が出土している。

弥生土器の壷18は頸部と胴部との境に刺突列点文が施される。焼成は軟質である。19は口縁が上下に拡張し、3条の凹線文が施される。頸部外面にナデ、内面に搾り目が認められ、摩耗している。チャートの細・粗粒砂を多く含む。口縁部内面に黒斑がみられる。20は内面は指ナデ、外面にタテハケが施される。21は外面叩き目を認める。胴部外面にハケ状原体による列点文を施し、黒斑がみられる。28は外面にタテハケとナデを施す。内面器表の剥離が激しい。

弥生土器の甕22は口縁部内面にヨコナデとヨコハケを施す。口唇部は面をとり、下方へわずかにつまみ上げる。口頸部外面にタテハケを施し、外面上部は煤ける。23は口唇部に強いヨコナデ、頸胴部外面にタテハケを施す。胴部内面は右から左へのヘラケズリとナデがみられる。チャートの粗粒



第28図　下層の検出遺構全体図



第29図　SK29～SK31　平面及び断面図

砂を多く含む。外面は煤ける。24は口縁内面ヨコハケ、口頸部外面タテハケ、口唇部はヨコハケとナデを施す。外面は煤ける。25は外面に僅かに煤けが残るが、内外面ともに激しく摩耗している。チャートの粗粒砂を多く含む。26は甕の底部である。内面下は上のケズリとナデ、外面はタテハケを施す。内面底部以外は激しく煤ける。外面には煤け、被熱赤変が認められる。27は内面にナデ、外面はタテハケを施す。外面には煤け、被熱赤変が認められる。チャートの粗粒砂を多く含む。

その他、弥生土器口縁部19点、胴部276点、底部7点、搬入品と思われる胴部2点、底部1点が出土している。

SK31（第29・30図）

調査地中央より北、東端にある。東は調査区外に延び全体の形状は不明であるが、南北確認延長1.31m、東西確認延長1.31mを測る。深さは17cm前後で、断面は舟底状を呈す。埋土は濃黒褐色粘質土。

遺物は弥生土器壷（17）、石製品1点が出土している。17は弥生土器壷で内面にヨコハケ、外面にタテハケを施す。口縁端部が僅かに上方につまみ上がる。その他、弥生土器口縁部8点、胴部38点、石製品1点が出土している。

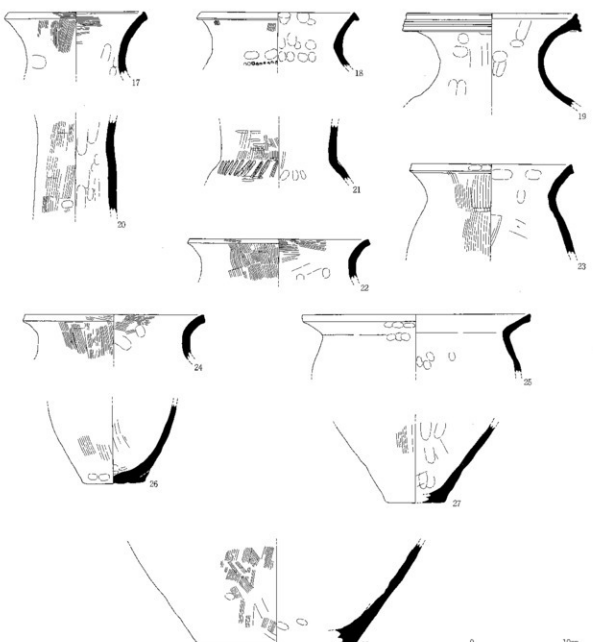
(2) 下層の包含層出土遺物

下層包含層より、弥生土器壷（31・32）、須恵器の蓋（29）、壷（30）、須恵器甕（33）が出土している。（第30・31図）

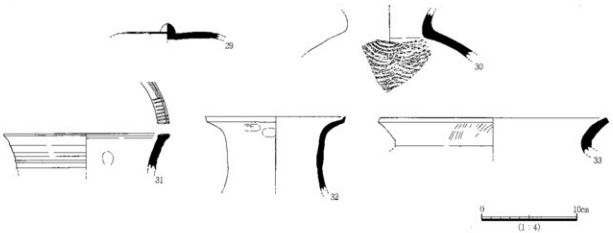
31と32は弥生土器の壷である。31は搬入品で口唇部は拡張し、刻目状の短沈線と2条のヘラ描沈線、頸部には凹線文が施される。32は口縁が上方に拡張し、ヨコナデを施す。胎土はチャートの粗粒を多く含む。摩耗が激しい。29は須恵器の蓋である。天井部内外面ケズリとナデを施す。30

は須恵器の壺である。胴部内面に同心円文状の当て具痕が認められ、外面には自然釉が掛かる。33は須恵器甕である。口縁部外面にヨコハケとヨコナデ、内面にヨコナデを施す。胎土は灰色で黒色粒を含む。

その他、弥生土器口縁部23点、胴部234点、底部2点、弥生土器搬入品底部1点、土師質土器口縁部11点、胴部38点、底部12点、須恵器甕口縁部1点、胴部22点、底部1点、須恵器皿底部1点、石製品2点、炭化物1点の合計349点が出土している。



第30図　SK30・SK31及び下層の包含層出土遺物



第31図　下層の包含層出土遺物

第4章　まとめ

1．上岡北遺跡の遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した遺構や遺物などを大別すると、上層（近世中頃～近代）・中層（近世）・下層（弥生時代～古代）の3時期で捉えることができる。

まず、中層で旧堤防が出土している関係上、調査区外であり発掘調査の成果ではないが、調査区に隣接し現在も地上で現認できる現堤防について述べてみる。

現堤防は物部川左岸沿いに設置されている堤防で、調査区西側での主軸は真北より東へ19°振っている。堤防の北側は上流に向かって続いており南鳥は上岡山に突き当たっている。現堤防を観察してみると、裏法側の一部に積み直しが行われている箇所が認められた。災害等によって崩壊し積み直されたものと推測される。

現堤防の石積み最下部基底部の石下には茶灰色シルト質土の層がみられ、その下に氾濫による堆積もしくは撹乱による礫砂層があった。この礫砂層は堤防築堤の際、高さ等の調整を行い基礎にしていると推察される。また、堤防に使用されている石は20～30㎝大の河原石で構成されており西を流れる物部川の河原から調達したと考えられる。

現堤防がいつ築堤されたかについてはっきりした資料はみられないが、明治時代に入ってから堤防の管理・経営の権限が関係町村の自治に移されている。明治27年1月に設立した物部川水害予防組合によって堤防工事が行われており昭和4年まで続いている。この明治時代から昭和時代の間に現堤防は築堤されたと考えられる。

以下、今回の発掘調査における上層・中層・下層について順に述べていく。

上層の遺構として近世中頃以降の耕作地があげられる。石列状遺構によって区画された耕作地と土坑を検出した。土坑は大別すると埋土が砂と、1～20㎝前後の河原石が放り込まれている土坑の2種類が存在していたが、その意味を見い出すことはできなかった。

また、石列で区画された耕作地と土坑を同時期と考えることはできないが、近世中頃以降から近代にかけての比較的新しい時期の遺構であると考えられる。

上層遺構からの遺物として、3遺構から遺物が出土した。SK17から近世以降と思われる陶器胴部が1点出土しているが産地は不明である。

また、SK19から土師質土器細片が1点出土しているが、摩耗が激しく流れ込みによるものと考えられる。

SK27から肥前系の型紙摺の印判皿と思われるものが1点出土している。見込みには松竹梅文を環状に表し、足付きハマの跡がみられる。高台は蛇ノ目凹高台を呈している。明治時代前半のものではないかと考えられる。

この他、上層の包含層からは18世紀から19世紀にかけての肥前系または瀬戸・美濃系陶磁器や能茶山焼等の遺物が出土している。

次に中層の遺構として旧堤防があげられる。旧堤防も現堤防と同じく物部川沿いに設置された堤防で、長軸方向は真北より東へ45°振り、現堤防と旧堤防の角度差は26°である。検出した旧堤防の確認延長は29.2mを測り、調査区の北端より南西方向約25.0m付近で調査区西壁に突き当たり現堤防の下を通り南西部は調査区外に延びている。北東部分についても調査区外の北に延びており全体の規模は不明である。

旧堤防に利用されている石には山石が数個みられたが、大半は河原石の丸石で西を流れる物部川から調達したものと考えられる。

旧堤防の馬踏は石積みが施されており、馬踏の延長は確認部で約29.7m、馬踏の幅は約1.7m～2.0mを測り、東側から西側に向かって約6～7°傾斜して下がっている。

検出時において北側馬踏の上に三角状の範囲で石列が乗っていた箇所がみられた（B. 北側堤防上石列部分）。旧堤防と石列の間に堆積していた茶褐色砂～シルト質土は堤防内部の土と酷似しており、その上に砂礫層の堆積がみられた。この事はこの石列が本来の馬踏部で、河川氾濫時に表法側と馬踏西側表面に積まれていた石が西側からの力を受け崩落し、馬踏表面の石が三角状の範囲で石列状に残った可能性が考えられる。

また、旧堤防本来の馬踏は検出時には既に破壊されていた可能性も考えられる。調査区北壁の断面で土層の確認を行ったが、少なくとも2回以上の氾濫の影響と考えられる堆積層が旧堤防の馬踏上に追っており、氾濫による影響で馬踏が壊れた際、後世に補修したものかもしれない。

次に法面であるが、表法面および裏法面はすべて石積みが施されている。表法側は氾濫などによる影響で馬踏から崩落した石が堆積しており本来の姿は不明瞭である。また、表法側の西は調査区外となっており、詳細な調査が行えたのは断面調査時の1箇所である。

裏法側の表面の一部で馬踏に敷かれてあった石が崩落した箇所がみられたが（A. 南側崩落部分）巨視的にみて裏法は揃った状態で比較的良好な状態で残っている。使用されている石は40～50cm大の河原石が積まれている。裏法面の角度は45°前後が基調となっており、土留めや枠類等の木製品等は確認できなかった。

1箇所だけ断面調査を行い内部の様子を観察した。堤防内部の埋土は20～40cm大の河原石と茶褐色粘質～シルト質土で締め固めている。旧堤防の断面形を台形としてみてみると上辺が1.82m前後で馬踏の幅にあたる。高さは1.84m前後で馬踏の上面から敷の下面までの長さである。馬踏裏法側では確認できるが表面に敷かれていた石は西側に向かって6～7°傾斜して下がっており、表法側では正確な高さは不明である。下辺は5.15m前後で敷の幅にあたる。敷の幅についても表法最下部の根石などは氾濫などの影響で動いており、正確な敷の幅を特定することは今回の調査ではできなかった。

出土遺物は断面調査時に近世陶器片が1点出土しているが、正確な生産地と時期比定は難しく堤防築堤の時期を判断することはできなかった。

現堤防と旧堤防の築堤されている高さに違いがみられる。堤防が築堤された場所はほぼ同じ場所であるが、近世と近代においての堤防の高さについて基準及び判断等が明確に違っている事が指摘できる。現堤防馬踏から旧堤防馬踏までの標高差は約3m前後で、同じく現堤防基底部から旧堤防

基底部までの標高差は約3m前後である。

旧堤防が築堤された当時の堤防からみて、現堤防が築堤されているのは約3m高い位置である。

物部川の河床が現在より低かったと考えれば、土砂の堆積により現在は河床が上がっていると考えられるが、現在より水量があったのか、現在の流心より西を流れていたのか高さの違いについて発掘調査での証拠は見つかっていない。

旧堤防の築堤当時は十分な高さであると判断されていたであろうが、その後の災害などで旧堤防を越える事態に見舞われた事が、調査区の北壁で確認した氾濫の痕跡や旧堤防の崩れから読みとることができる。

堤防の高さの相違について今回の調査で明らかにすることはできなかったが、旧堤防の築堤時と現在では河川の状態が異なっていたであろうことを示している。

最後に下層の遺構として弥生時代と古代の土坑があげられる。

弥生時代と古代の遺物及び遺構は調査地全体の東側に散発的にみられた。南側に隣接している上岡遺跡[註1]でも、弥生時代前期末～中期の土器が多量に出土した性格不明遺構や、後期前半の土坑のほか、後期中葉の竪穴住居2棟などが確認されており、上岡北遺跡の東部分に同様の生活痕跡がみられる。この東側にみられる遺構から推測して、調査地より東側に弥生時代から古代の遺構などが残っていると考えられる。

調査地北側の西部分は現堤防や旧堤防付近にあたり、近世・近代による堤防築堤などの影響を受け下層の遺構は残っていない。また東側の北側部分も弥生時代以降におきた河川の氾濫の影響で下層の遺構は残っていないが、物部川下流域の左岸段丘上の様相を解明する上で貴重な成果となった。

2．絵図からみる旧堤防の築堤時期について

旧堤防の築堤時期についてであるが、断面調査時に近世陶器片1点が出土している。しかし、正確な生産地と時期比定が難しく出土遺物から築堤時期を明らかにすることはできなかった。

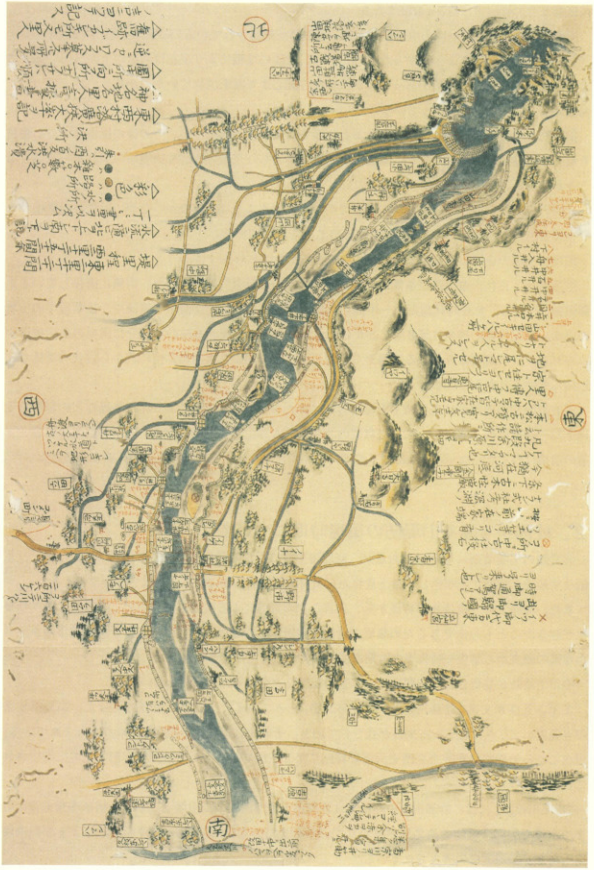
また、堤防という構造物の特徴から、災害などの影響による破堤や補修など、築堤後に様々な事象が起きたことも想定できるため築堤の時期を判断することは容易ではなく、考古学的手法を用いた今回の調査から築堤や補修等の時期を明らかにすることができなかった。

そこで堤防が築堤された時期について昔の絵図などを参考に考えてみたい。

まず、五藤家文書『物部川絵図』[註2](第32図)をみてみる。土佐藩の家老であった、高知県安芸の五藤家に2万点を超える古文書が残されており、その中に藩政期の絵図約100点が含まれている。現在これらの史料は安芸市立歴史民俗資料館に保管されており、高知県保護有形文化財に指定されている。

『物部川絵図』には、物部川を中心に北は香美市土佐山田町の山田堰上流から、南は香南市吉川町まで水路や陸路、堤防、地名等が描かれている。また、寛政元（1789）年夏の洪水による堤防決壊箇所などが絵地図に朱書きされている。

この絵図の地図が製作された年が寛政元年かどうかは不明であるが、朱書きされている箇所につ



第32図　五藤家文書『物部川絵図』

いては「朱引ハ酉ノ夏洪水潰決ノ所」とあり、洪水の起きた寛政元年夏或いはそれ以降に記されたと考えられる。

このように現在より二百余年前の状態が克明に描かれてあり、その中でも今回注目すべき点は、上流の山田堰から両岸に連なって描かれている堤防である。この事は絵図が作製された年には物部川に堤防が存在していたということになる。

絵図に「堤里程　東二里十丁二十一間　西二里十二丁五十二間余」と記されてあり、この時には山田堰から下流に向かって東岸に約8.983km、西岸に約9.258km余[註3]堤防が築かれていたことがわかる。

また「上ヲカ」の西側「八マン」と書かれた場所が現在の上岡八幡宮で、その北側に森のように描かれてある部分が上岡山である。この上岡山の北西裾から北に向かって延びる堤防の位置が今回検出した旧堤防の位置と合致している。絵図に描かれてある堤防が出土した旧堤防だと想定すると、少なくとも二百余年前には機能していたことになり、この付近が今回調査を行った上岡北遺跡に比定することができる。

この場所から少し上流部に中州が描かれてあるが、ここで川の流れが分流しており、中州の東側を流れる水は堤防の南端部まで追っている。この南端部は調査区外であるため不明ではあるが、旧堤防の南端部は上岡山西裾部向いて築堤され、水は表法付近までできていたと推測される。

また、調査した場所付近より少し北から上岡山西裾に向かって堤防は湾曲しているのが分かる。推測ではあるが、河川増水時に被害を減少させるための湾曲と思われる。上岡山に水が突きあたり東側の堤内に被害がないよう、川の水を南西に逃がすために設けられた導流堤のような役割を果たしていたと思われる。

検出した旧堤防と考えられる場所もしくはその北側に朱書きで「コノ間クツレ　十六ケン　七ケン」（十六ケン＝約29.08m、七ケン＝約12.72m）[註4]と書かれてあり、寛政元年夏の洪水によって堤防が崩れたことを示している。その北側にも「キレ六十二ケン」（約112.72m）、「コノ間四十ケンミゾタイツへ」（約72.72m）、「三十ケンツへ」（約54.54m）と書かれてあり、物部川橋東詰南の上岡地区と深淵地区の境から上岡山までの南北約700mの区間に築堤されている堤防の被害状況だけでも、155ケン（間）＝約282mの約40％が何らかの被害を受けていることがわかる。

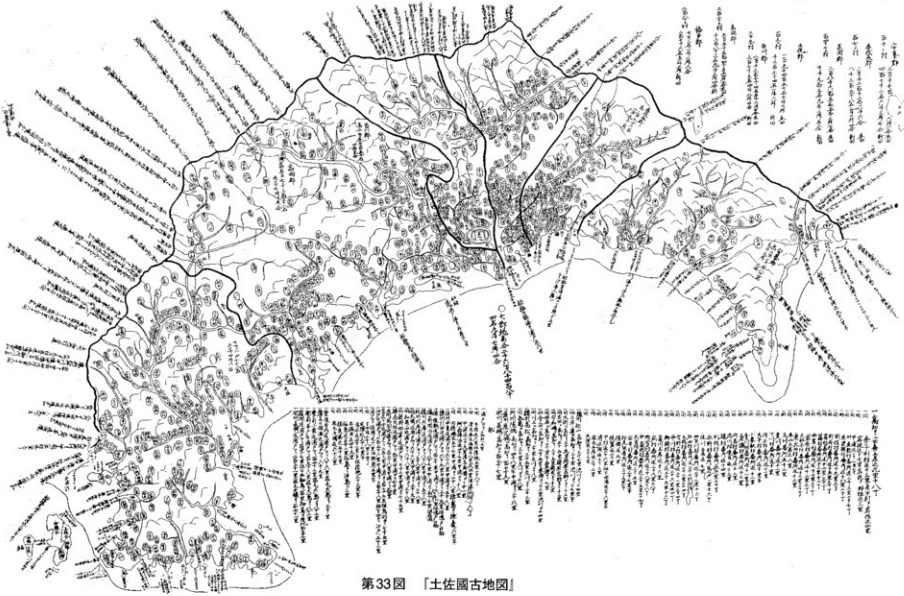
今回の調査で確認できた氾濫の痕跡や表法の崩れが、直接この洪水によるものかどうかは不明であるが、旧堤防表法まで水がきていたことや破堤があったことは絵図から読みとることができる。

また旧堤防付近の堤防は、絵図に描かれてある堤防の中でも幅が細く描かれており、水害時の影響が比較的小さい場所である可能性も一応考えることができる。

次に、高知海南史学会が発行している『高知県歴史地図』[註5]内に掲載されている『土佐國古地図』（第33図）をみてみる。この古地図は模写・複写されたもので、原図は高知県立図書館が所蔵している。解説によると古地図は正保3（1646）年、幕府の要請に応じて提出し、その後、元禄10（1697）年に絵図を改訂することになり、同13（1700）年、1部を幕府に提出し、その1部を山内家に保管していたものである。原図に作製された年代が記入されていないため時期は不明ではあるが、藩政中期の姿を示したものと考えられている。

土佐の國古地圖（幕政中期）

高知県立中央図書館蔵



第33図　『土佐國古地図』

絵図には土佐国（現高知県）全体の陸道や海路、港、河川などが描かれており、物部川も描かれている。

前述のとおり、正保3年頃もしくは元禄13年頃の物部川の様子であるが、当初提出された当時のままであるか改訂時に修正されているかは不明である。

また土佐国全体の絵地図であるため詳細な部分は描かれていないが、物部川が現在の河道とほぼ同じであるように見受けられる。仮に、物部川周辺の部分が正保3年当時に描かれたままで修正されていないと仮定すると、この時期に物部川は現在の河道に近い状態であったと考えられる。しかしながら自然堤防によって現在の河道に近い状態になっていたのか、堤防が築堤されていたかどうか絵図からは分からない。

絵図が提出される以前の寛永16（1639）年には物部川の山田堰工事着手や右岸の中井川の完成、また正保元（1644）年には野市中井堰、正保2（1645）年には山田上井川が完成しており物部川改修工事の真っ直中であった時期である。

そして寛文4（1664）年には山田堰、野市下井堰が完成している。

これらの事から、絵図改訂後の元禄13（1700）年頃の様子であるとしたら、物部川の回収事業は一応の終わりをみせており、これ以前に現在の河道とほぼ同じになっていたと考えられる。

先に述べた『物部川絵図』寛政元（1789）年には堤防が描かれている。物部川に堤防が築堤された時期はそれ以前であることには疑いようもないが、『土佐國古地図』をみるとその時期よりも遡る可能性が考えられる。

物部川の一本化は、絵図改訂後の元禄13年（1700年）以前、もしくは正保3（1646）年以前と考えることができ、物部川周辺の改修事業の時期に堤防が築堤された可能性も考えられる。

この物部川改修事業では堰や水路が新設されていくが、堤防築堤のことについては管見の限りでは文献や記録が残っていない。しかしながら堰や枝の水路などの工事よりも優先して本流を流れる水の制御を考えたであろうと推察できる。

近世初期頃における河川改修事業の時期に並行して、もしくは前段階に堤防が物部川両岸に築堤された可能性が考えられる。

3.『長宗我部地検帳』と発掘調査成果からみる上岡地区の景観

上岡北遺跡がある上岡地区の大字・小字（ホノギ）名の地名について野市町小字図[註6]及び『長宗我部地検帳』[註7]を中心に、これまでに実施された発掘調査の結果も交えながら、地名との関連性や当時の景観についてみてみる。

現在、上岡北遺跡の位置する地域は高知県香南市野市町上岡である。大字は上岡で小字は北から順に柳ヶ内、井ノ内、野本、下ノ坪、中津町、和田、地蔵ノ前、神母屋敷、執行屋敷、手水屋敷、堤ヶ内、宮ノ前、和佐田、岸之下タ、久保、前島の16がある。[註8]（第34図）

現在は野市町上岡であるが、昭和17年まで旭内島・物部村とともに三島村（現南国市）に含まれており三島村の分村により野市町に編入された。

第34図　上岡北遺跡周辺小字図

上岡は中世の『長宗我部地検帳』では、物部庄の地検帳に上岡・陸内島・物部庄の三村に含まれており、物部庄内上岡村と記載されている。

物部庄は古代には国衙領の物部郷であったが、中世に荘園制の私有地化により物部庄となっている。

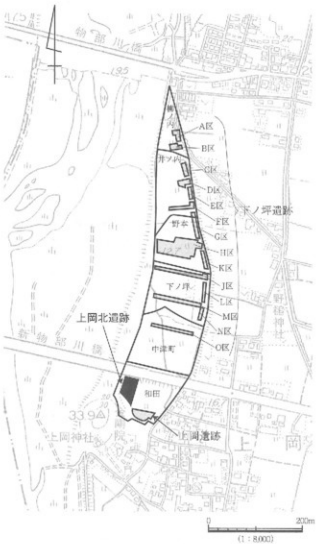
中世の『長宗我部地検帳』をみてみると、上岡村の検地は天正16（1588）年10月22日、「深淵郷堺大道ノ南カキソへ」より開始され24日まで実施されており、地積は「拾八町八反五代」（56,430歩[注9]＝約205,687㎡[注10]）と記載されている。地検帳には上岡地区の東側上段に位置する野市台地上（以下、上段）に「地蔵ノ前」「テウツやしき」「イケやしき」「クラやしき」「上岡執行やしき」「シハやしき」などの地名がみられ「ヤシキ数大小廿九」と記載されており現在も住宅街の中心地となっている。また、西側下段に位置する物部川左岸の河岸段丘上（以下、下段）には、「ユノウチ」「ワタ川原」「ハカマカ内」「ノモト」「下ノ坪」「エホシ」「中ツ町」などの地名がみられる。

この中でも下段は発掘調査が実施されており、その結果も交えながら『長宗我部地検帳』を中心に地名についての関連性や当時の景観について考えてみたい。

まず、物部川橋東詰め南、小字「柳ヶ内」は上岡地区と深渕地区の境である。（第35図）

地検帳には、

深淵郷堺大道ノ南カキソへ 一所四十代	出十五代四歩才 下	物部庄内上岡村	介衛門作 池内肥前守給
同しノ南 一、弐反卅代	出二代二歩 下	同	孫三郎扣 定満名
同しノ南カキノ木ノ本 一、壱反	出五代一分 下	同	主作 清本名
同しノ南柿ノ木ノ本 一、六反	出二反四十 下	同	主作 延友名
カロウト大堺 一、壱反四十二代一分	下	同	門田与衛門扣 吉重名
同しノ道同し 一、弐反八代五分	下	同	松田与左衛門扣 同し名
大道ノ浦川ヲ詰テ大堺川成残分 一、五代二分	下	同	与二良作 門田名
川原タ川詰テ 一、壱反廿代	出弟五代 下々	同	池内菖蒲給
同しノ西上下かけて 一、廿代	出十六代 内十六代畠下々 残田分下々	同	池内菖蒲給
ホリケカノ内西ノ下かけて 一、四段	出一反廿代 中 内一反長福寺寺領ニ立 一反十八幡神テン	同	主作 名分　清本名
殿タクホかけて 一、四十代	出十四代 中	同	主作 名分　光家名
同しノ南クホかけて 一、廿五代	出十一代 中	同	主作 名分　三良丸名
同しノ南 一、四十代	出廿代一分 中	同	中ヤ作 池内菖蒲給



第35図　上岡地区下段の小字名とこれまでに実施した発掘調査箇所

とあり、「大道ノ浦川ヲ詰テ大堺川成残分」「カロウト大堺ノ道同し」などの記載がみられる。

「大道」は現在の旧道（県道南国野市線）付近と考えられ、検地の開始場所は物部川橋東詰め付近に比定されており、ここは深渕郷と上岡村の境となっている。

現在、柳ヶ内の面積は約5,000㎡である。「殿タクホかけて」から「殿タクホかけてノ南クホかけてノ南」が柳ヶ内に比定できる。

「川原タ川詰テ」から「ホリケカノ内西ノ下かけて」は、柳ヶ内の西側に比定でき物部川河原に耕地が広がっていたと推測される。

柳ヶ内は平成6～8年に発掘調査を行った下ノ坪遺跡[註11]の調査区「A区」・「B区」として一部調査を行っている。弥生時代後期の竪穴住居や土坑、古墳時代後期の竪穴住居、古代の掘立柱建物や柵列などの遺構が確認されており弥生土器、土師器、須恵器などの遺物が出土している。

その南に小字「井ノ内」がある。

地検帳には、

ユノウチ 一、弐反卅代	出一反十代一分勺 中 内一反十倍領 一反十明けん□田	同	神兵衛□ 延友名
同しノ南 一、四十代	一代二分 中	同	源三郎作 池内肥前守給
同しノ南 一、壱反	出八代二分 中	同	五郎二郎作 同し給
同しノ南 一、壱反卅代	出卅一代一分 中	同	五郎左衛門扣 福永名
同しノ南 一、壱反卅代	出卅四代 中	同	源三郎作 池内肥前守給
同しノ南大セマチ 一、弐反卅代	出卅五代 下	同	池内□□□ 同し
新タウ西クホかけて 一、四段	出一反廿七代一分 下	同	孫左衛門扣 名分　光家名
ワタ川原 一、壱町二反	下々山畠	同	

	内二反作メ下々畠 一丁久アレ		池内菖蒲給
ハカマカ内西クホかけて 一、壱反四十代	出一反一分 下	同	高□□作 同し給

とある。

現在、井ノ内の面積は約10,000㎡で「ユノウチ」から「ユノウチノ南大セマチ」までが井ノ内に比定でき、「新タウ西クホかけて」・「ワタ川原」・「ハカマカ内西クホかけて」は、その西側、物部川河原に比定でき当時は河原にも耕地が広がっていたと推測される。

井ノ内は下ノ坪遺跡の調査区「C区」・「D区」・「E区」・「F区」として一部調査を行っている。弥生時代後期の竪穴住居や古墳時代後期の竪穴住居、古代の溝などの遺構が確認されており、弥生時代の竪穴住居より勾玉、包含層より鉇尾などが出土している。井ノ内（ユノウチ）の名称は用水をくみ取る所、または引き込む所と解釈できると思われる。地検帳に記載されてあることから中世には呼称されていたと推察できるが、どの時代まで遡るかは不明である。

その南に小字「野本」がある。

地検帳には、

同し（ハカマカ内西クホかけて）ノ東 一、四十代	出廿代 下	同	五郎左衛門作 池内肥前給
同しノ東 一、四十代	出十六代一分杓 下	同	主作 三良丸名
同しノ東 一、壱反	出廿三代 下	同	三郎左衛門作 池内肥前守給
ノモト 一、壱反卅二代才	下　□□故打付	同	門田与衛門作 吉重名
同し 一、壱反卅二代五分杓	下　□□故打付	同	松田五良衛門作 同し
同し南横テ 一、壱反卅代	出廿一代三分 下	同	主作 延友名

とある。

現在、野本の面積は約10,300㎡で、「ハカマカ内西クホかけて」から「ハカマカ内西クホかけてノ東」3反39代1歩1勺＝1,135.5歩の約4,138㎡と、その南側「ノモト」から「ノモト南横テ」5反15代8歩1勺1才＝1,598.75歩の約5,827㎡をあわせた分が現在の野本に比定できる。

野本は下ノ坪遺跡の調査区「G区」・「H区」・「K区」として一部調査を行っている。弥生時代後期の竪穴住居、ガラス小玉や壷棺が出土しており、中でもH区からは古代の大型掘立柱建物15棟が検出し青銅鏡の四仙騎獣八稜鏡や硯などが出土している。

その南に小字「下ノ坪」がある。

地検帳には、

下ノ坪 一、九反十代	中	同	池内肥前守給
エホシ 一、廿代	出二代 中	同	入交□兵衛扣 弥千代名

御供田			
一、壱反	出廿代　八幡神テン 上	同	孫衛門作 光家名
六月テン			
一、三反　（張紙）此出遠写帳ニハ拾代と有之候へとも 此帳ハ出拾四代と見へ申候拾四代と算ニ入 本ハ十代地残一反十代内十畠下々		同	主作 延友名
ワタ川原ホリ田共ニ			
一、壱反十代	下　御領	同	門田□左衛門作 池内嘉蒲給
同しノ東西川詰テホリ明共			
一、弐反十代	出一反 下々	同	□□兵衛作 池内肥前□□
江タ			
一、弐反	出一反廿代 中	同	主作 延友名

とある。

現在、下ノ坪の面積は約13,800㎡であり、検地当時の地割りは定かではないが「下ノ坪」・「エホシ」・「御供田」の地積を合算すると11反2代＝3,312歩の約12,072㎡で現在の下ノ坪の面積に近い。

「六月テン」・「ワタ川原」などは下ノ坪の西側に比定でき物部川河原にも耕地が広がっていたと推測される。

下ノ坪の土地区画改良前の状態は1町1反8畝21歩強（3,561歩強＝約11,771㎡強）[注12]のほぼ正方形で区画の一部に乱れがみられた。地検帳には9反10代（2,760歩＝約10,060㎡）と記載されており池内肥前守の給地であった。

古代条里制の坪面積は、約109.09m×109.09m＝約11,900㎡であり、地検帳の「下ノ坪」・「エホシ」・「御供田」の地積を合算した分が下ノ坪であったと推察され、中世の検地時には「下ノ坪」・「エホシ」・「御供田」と分筆されていたようである。

下ノ坪は下ノ坪遺跡の調査区「J区」・「L区」・「M区」・「N区」として一部調査を行っている。弥生時代の竪穴住居などを検出しており鉄鏃・鉄斧・鑓などの鉄製品が多く出土している。

下ノ坪の「坪（ツボ）」の名称は、古代条里制における土地区画に由来していると思われるが、どの時代まで遡ることができるか不明である。

その南、国道55号線、新物部川橋の北側に小字「中津町」がある。

地検帳には、

中ノ町			
一、参反卅代	出卅九代 下	同	入交□□□持 弥千代名
同しノ東			
一、壱反	出十一代一分 中	同	門田□兵衛扣 池内嘉蒲給
同しノ東			
一、壱反	出廿代 中	同田分	三郎衛門作 池内嘉蒲給
中ツ町			
一、壱反十代	出四十代 中	同	孫三郎持 定満名
同しノ東道ヲ詰テ			
一、参段	出卅代 下	同	池田肥前守給

とある。

現在、中津町の面積は約14,000㎡で、「中ノ町」・「同しノ東」・「同しノ東」7反1歩＝2,101歩の約

7,658㎡と、その南側「中ツ町」・「同しノ東道詰テ」5反30代＝1,680歩の約6,123㎡をあわせると約13,781㎡になり、中津町は北側が「中ノ町」、南側が「中ツ町」に比定できる。

中津町は下ノ坪遺跡の調査区「O区」として一部調査を行っている。弥生時代後期の竪穴住居や土坑、古代～中世の掘立柱建物や溝などが確認されている。

中津町の「津（ツ）」の名称は、船舶の碇泊する所や船着き場、渡し場、人の集まるところと解釈することができ、港（港町）であった可能性が考えられる。しかし、地検帳に記載されてあることから中世には呼称されていたと推察できるが、どの時代まで遡るかは不明である。

その南に小字「和田」がある。

地検帳には、

ワタ 一、壱反十代	出一反　八幡霜月十五日神テン 中	同	門田□衛門□ 吉重名
同しノ東中ニクローツ有 一、参段卅五代	出一反十八代四分 下	同	池肥地替ト有 福永名
同しノ南カ、ミテン 一、一反五代	出五代 中 八幡十二月大晦日神テン	同	主作 中屋名
山ノ東ワタ 一、一反卅代	出廿代 上	同	池内肥前守給
同しノ南岸ヲ詰テ 一、一反五代	出一代 中 八幡六月一日鞍若田	同	主作 中屋名
同しノ東道ノ下 一、廿五代	出九代一分 下	同	介衛門作 池内肥前守給

とある。

現在、和田の面積は約13,400㎡で、検地当時の地割りは定かではないが、「ワタ」から「山ノ東ワタノ東道ノ下」までの地積を合算すると12反13代5歩＝3,683歩で約13,424㎡、地積は現在の和田とほぼ同じである。

和田は平成11年度に発掘調査を行った上岡遺跡と今回の上岡北遺跡がこの場所にあたる。

上岡遺跡は弥生時代後期の竪穴住居や土坑、古代の掘立柱建物が確認されている。上岡北遺跡については本報告書に掲載しているので割愛するが、調査区の東側において弥生時代の土坑が確認できている。この事は未調査である東側にも弥生時代の遺構が残存していることが想像できる。

和田（ワタ）の名称は地形に由来していると考えられる。この場所は上岡山の裾部で西は物部川に隔てられ入り江のような地形である。和田の和に（輪・回）を当てると、山、川、海などの入り江のような所を意味すると解釈できそうである。

以上、上岡地区下段の小字名を『長宗我部地検帳』と発掘調査の結果等から概観してみた。これらの事から上岡地区の景観を推察してみる。

まず、弥生時代後期初頭には「柳ヶ内」から「和田」までの下段に集落が形成される。後期第Ⅴ様式のⅤ－1期～Ⅴ－4期[註13]の遺構が全体的に広がっており、下ノ坪遺跡から上岡遺跡まで集落が展開していたことが確認されている。しかし集落は長くは存続しておらずⅤ－5期を待たずにこの

場所から生活の痕跡が消えている。また、近隣の下ノ坪遺跡や物部川右岸に所在する田村遺跡でも遺構が砂に埋まっていることが確認されており、これらの事から、この時期に起きた物部川の氾濫により集落が壊滅的な痛手を受け、廃絶されたものと考えられている。(註14)

Ⅴ－5期の生活跡は一段標高の高い野市台地上で確認されており、氾濫後は住居等を上段の台地上に移している。下段ではⅤ－4期以降、古墳時代後期に至るまで生活跡は確認できない。

古墳時代後期には「柳ヶ内」・「井ノ内」付近に、竪穴住居内部にカマドを有する集落が展開する。住居は約4～6mの隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居で、施設内部にカマドを有しており、土師器の甑や須恵器等などの出土遺物から6世紀後半～7世紀初め頃に比定することができる。この時期には北側に位置する深渕遺跡や上段の野市台地上に位置する西野遺跡群においてもカマドを有する竪穴住居跡等が確認されており、上岡地区から深渕地区一帯の広い範囲に集落が展開していたと推測できる。

古代になると大型の柱で構成される掘立柱建物跡が「下ノ坪」付近を中心に展開をみせる。整然と並んだ建物跡からは八稜鏡や円面硯・風字硯・転用硯・緑釉陶器などの遺物が出土しており官衙的性格を有している。小字（ホノギ）名がどこまで遡って呼称されていたのかは不明であるが「下ノ坪」は古代条里制の地割区画で現在もその様子を窺い知ることができる。

その南「中津町」（津＝ツ）の小字名は、港もしくは港町の存在を忍ばせており、河川を利用した港として官衙的要素をもった郡津的な役割を果たしていた施設が付近に存在したものと考えられ、古くから残る名称ではないかと推察される。その南の「和田」は上岡山と野市台地に挟まれた入り江のような場所で、近世の旧堤防築堤時等に攪乱を受けたため、以前に何が存在したのか知る術はないが入り江のような地形であったことが想像でき、和田や中津町付近に船着き場などの施設が存在していたことが想定できるのではないだろうか。

中世の終わり頃は『長宗我部地検帳』からその景観を窺うことができる。「柳ヶ内」から「和田」にかけて水田地帯であった。香宗我部氏の領地であり家臣に給地として与えた土地が多く、中でも家臣池内氏の所領分が多くみられる。地検帳に記載されている地積を合算すると現在の小字より土地面積が広いことが分かる。この時期の物部川は現在より西を流れており、現在は河原となっている場所にも耕地が広がっていたようである。

近世になると、この時期に実施された河川改修事業により山田堰が構築され、各井筋の整備等が進められる。また、河川両岸には今回の発掘調査で出土した堤防を含め河川両岸に堤防が築堤されたと考えられ、物部川が現在の流れに近くなる。これらの事業により新田開発が進み、物部川より西側や野市台地上の景観はこれまでのものから一変する。

現在は上岡遺跡の位置に地区公民館、上岡北遺跡の位置には処理場が建っている。国道55号線、新物部川橋から北側を望むと田園風景が広がっており昔の景観がうっすらと浮かんでくるようである。

[註]

（1）更谷大介・濱洞真紀『上岡遺跡』野市町教育委員会 2005年
（2）五藤家文書『物部川絵図』高知県安芸市立歴史民俗資料館所蔵
（3）1里＝3927.2m・1丁（町）＝109.0909m・1間＝1.8181mで計算し小数点以下は切り捨てた。
（4）1間＝1.8181mで計算し小数第3位以下は切り捨てた。
（5）依光貫之『高知県歴史地図』高知海南史学会 1968年
（6）野市町史編纂委員会「野市町史附属地図」『野市町史』野市町 1992年
（7）示野　昇『長宗我部地検帳』香美郡上・下 高知県立図書館 1962年
（8）角川日本地名大辞典編纂委員会『高知県地名大辞典』角川書店 1986年
（9）1町＝10反・1反＝50代・1代＝6歩・1勺＝0.5歩・1才＝0.25歩で計算し歩で表記した。
（10）地積の計算は検地時の6尺3寸竿（約1.9090m）使用、1歩を3.645㎡で計算し小数点以下は切り捨てた。
（11）出原恵三・池澤俊幸・行藤たけし・小松大洋 他『下ノ坪遺跡Ⅰ～Ⅲ』野市町教育委員会 1997～2000年
（12）1町＝10反・1反＝10畝・1畝＝30歩、1歩を3.305㎡で計算し小数点以下は切り捨てた。
（13）出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社 2000年
（14）出原恵三「下ノ坪遺跡弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会 1998年

[参考文献]

建設省高知工事事務所『高知工事四十年史』社団法人建設弘済会 1987年
山田堰記録保存調査委員会『山田堰』土佐山田町 1984年
畑　大介「堤防考古学の視角と課題 －甲州の事例を中心に－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第5集』帝京大学山梨文化財研究所 1994年
畑　大介「中世の治水と利水をめぐる考古学的課題」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第8集』帝京大学山梨文化財研究所 1997年
畑　大介・河西　学・松葉礼子・山下孝司『塩川下河原堤防遺跡発掘調査報告書』韮崎市・韮崎市教育委員会 1998年
畑　大介『近世の治水用枠類をめぐる一考察 －甲州の事例から－』『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会 1999年
辻　広志・河合順之『堤遺跡第2・3次発掘調査報告書』中州町教育委員会 2001年
『治水・利水遺跡を考える』第7回東日本埋蔵文化財研究会 1998年
畑　大介『山梨県堤防・河岸遺跡 分布調査報告書』山梨県教育委員会 1998年
北垣聰一郎「『白根将棋頭』と『石積出し』について」『将棋頭遺跡 須沢城跡』山梨県白根町教育委員会 1989年
川口宏海「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」1997年
半尾遺雄『県民グラフ歴史特集 土佐 その国土と史話』高知県 1973年
横川末吉『長宗我部地検帳の研究』高知市立市民図書館 1961年
浜田春水『土佐日記の大湊』『土佐史談』100号 土佐史談会 1961年
中沢千里「物部川大改修工事に関する一考察」『土佐史談』174号 土佐史談会 1987年
杉原直樹「物部川・仁淀川における近代河川工事の歴史」『土佐史談』194号 土佐史談会 1993年
依光貫之『野中兼山・婉女そして土佐山田』土佐山田町教育委員会 2000年
徳平　晶『堰と用水路』春野町立郷土資料館 2001年
秋憲一郎・森　公章・市村高男・下村公彦・田村安興『高知県の歴史』山川出版社 2001年
高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
佐竹　寛・吉成承三『深渕北遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1996年
南国市史編纂委員会『南国市史』南国市 1979年
香我美町史編纂委員会『香我美町史』香我美町 1985年
夜須町史編纂委員会『夜須町史』夜須町教育委員会 1984年
吉川村史編纂委員会『吉川村史』吉川村 1999年
赤岡町史編纂委員会『赤岡町史』赤岡町教育委員会 1980年
野市町史編纂委員会『野市町史』野市町 1992年

遺物観察表

表1　遺物観察表（上層）

挿図－遺物番号	出土地点/層位	種類	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	色調	特徴	備考
第16図　－　1	包含層	磁器染付	碗	－	2.5	－	4.2	精緻	内）明緑灰 5G7/1 外）明緑灰 5G7/1 断）灰白 N7/	白濁色の透明釉が畳付以外全面に施釉。外面ややあせた呉須による草花文。	肥前系。
＊　－　2	包含層	磁器染付	碗 丸形	－	2.7	－	(5.0)	精緻	内）灰白 2.5GY8/1 外）灰白 2.5GY8/1 断）灰白 N 8/	高台外面、高台脇に陶錆。	肥前18C代。
＊　－　3	包含層	陶器	碗 丸形	(11.2)	4.4	－	－	淡黄色でやや粗い	内）灰黄 2.5Y7/2 外）灰黄 2.5Y7/2 断）灰白 2.5Y8/1	灰粗は淡黄色を帯びる半透明の釉で細かい貫入がみられる。	肥前系17C後～18C代。
＊　－　4	包含層	陶器	碗	－	3.4	－	(6.1)	淡黄色	内）灰白 5Y7/2 外）灰白 5Y7/2 断）灰白 7.5Y8/1	内面は全面、外面は高台から0.9～1.3cmにまで施釉。2箇所に目跡が残る。	瀬戸か。
＊　－　5	包含層	磁器染付	碗 広東形	－	(4.85)	－	5.9	精緻	内）灰白 5GY8/1 外）灰白 5GY8/1 断）灰白 N8/	外面に横、草花文。見込み文様不明。	肥前系19C～幕末。
＊　－　6	包含層	磁器染付	碗 広東形	(11.0)	6.5	－	(5.2)	精緻	内）灰白 5GY8/1 外）灰白 5GY8/1 断）灰白 N8/1	外面、雨降り文。高台外面2字の銘線。内面、1線と見込みに陽線、中央に寿。	肥前系1780年代～19C中葉。
＊　－　7	包含層	磁器染付	碗 広東形	(11.0)	6.8	－	(5.8)	精緻	内）灰白 2.5GY8/1 外）灰白 2.5GY8/1 断）灰白 N8/	外面に草花文。見込み文様不明。	肥前系18C末～19C。
＊　－　8	包含層	陶器	皿	13.0	4.4	－	5.4	精緻	内）灰オリーブ 5Y6/2 外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白 N7/	灰釉は灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。見込みは絵ノ目釉剥ぎを施す。外面は高台、高台脇蓋皿。	能茶山。
＊　－　9	包含層	陶器	皿	－	－	－	(5.8)	やや粗い	内）オリーブ灰 2.5GY6/1 外）オリーブ灰 2.5GY6/1 断）灰白 N7/	灰釉はオリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明釉。内面、絵ノ目状にカキとる。内底、中央に葉紅焼き。外面、胴リャナデ。外面は高台付近まで施釉。削り出し高台、断面台形。	肥前産内野山窯18C。
＊　－　10	包含層	陶器	徳利	3.4	(15.75)	－	－	精緻	内）灰白 5Y8/1 外）灰白 5Y8/2 断）灰白 5Y8/2	白濁釉と鉄釉の掛け分け。外面、赤い形の絵付け。	
＊　－　11	包含層	磁器染付	鉢 八角（形）	14.8	(3.9)	－	－	精緻	内）灰白 5Y8/1 外）灰白 10Y8/2 断）灰白 5Y8/1	呉須はあせている。	肥前系19C代。
＊　－　12	包含層	磁器染付	皿	－	1.5	－	(15.3)	精緻	内）灰白 5GY8/1 外）灰白 5GY8/1 断）灰白 N8/	内外面、文様不明。	肥前産18C。
＊　－　13	包含層	土師質土器	カマドか	34.2	(11.6)	－	－	精緻	内）にぶい黄橙 10YR7/4 外）褐灰 10YR5/1 断）にぶい黄橙 7.5YR 6/4	内面、布目圧痕。外面、ヨコナデ。内外面、ススケ。外面、口縁下に三角形状の圧痕文。	下樹は明治。
＊　－　14	包含層	陶器	鉢	26.8	(11.1)	－	－	精緻	内）灰オリーブ 7.5Y6/2 外）灰オリーブ 7.5Y6/2 断）灰黄 2.5Y6/2	白化粧土のハケ目。	能茶山19C。
＊　－　15	包含層	陶器	甕	(34.0)	－	6.3	－	やや粗い	内）暗赤褐 5YR3/4 外）暗赤褐 5YR3/4 断）灰白 N8/	鉄釉。1線下字に拡張。	関西系か。

表2　遺物観察表（中層）

挿図－遺物番号	出土地点/層位	種類	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	胴径	底径	胎土	色調	特徴	備考
第27図　－　16	石組1	陶器	甕	(34.0)	(4.6)	－	－	－	内）オリーブ黒 5Y3/2 外）暗褐 7.5YR3/3 断）にぶい橙 10YR7/2	外面鉄釉。内面灰釉。口縁部内外に拡張。	丹波19C前～後か。

表3　遺物観察表（下層）

掲図－遺物番号	出土地点/層位	器種	器種器形	法量（cm）				胎土	色調	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径				
第31図 － 17	SK31	弥生土器	壺	(14.2)	6.7	－	－	チャートの粗粒砂を多く含む	内）にぶい橙 7.5YR7/4 外）浅黄橙 7.5YR8/3	内面ヨコハケ。外面タテハケ。口縁端部僅かに上方につまみ上げ。	
〃 － 18	SK30	弥生土器	壺	(16.2)	5.7	－	－	チャート他の粗粒砂を含む	内）にぶい黄橙 10YR7/3 外）にぶい橙 7.5YR6/3	口縁下方に拡張し、強いヨコナデ。張部外面タテハケ。胴部との境に粘貼閉点文。	
〃 － 19	SK30	弥生土器	壺	(18.0)	9.9	－	－	チャートの細・粗粒砂を多く含む	内）浅黄橙 7.5YR8/3 外）にぶい橙 7.5YR7/4	口縁上下に拡張。3条の凹線文。	
〃 － 20	SK30	弥生土器	壺	－	9.8	－	－	チャート他の粗粒砂を多く含む	内）にぶい橙 7.5YR7/4 外）浅黄橙 7.5YR8/3	内面指ナデ。外面タテハケ。	
〃 － 21	SK30	弥生土器	鉢	－	－	－	－	チャートの細・粗粒砂を多く含む	内）にぶい褐 7.5YR6/3 外）明褐灰 7.5YR7/2	外面叩き目。胴部外面にハケ状施文体による列点文。	
〃 － 22	SK30	弥生土器	壺	(19.0)	4.2	－	－	チャートの粗粒砂を多く含む	内）浅黄橙 10YR8/3 外）にぶい橙 7.5YR7/4	口縁内面ヘラナデ＋ハケ。口唇面をヨコナデ。下方へわずかにつまむ。口頸部外面タテハケ。	外面煤ける。
〃 － 23	SK30	弥生土器	壺	(17.0)	9.5	－	－	チャートの粗粒砂を多く含む	内）にぶい橙 7.5YR8/4 外）灰褐 7.5YR6/2	口唇ヨコナデ。頸胴部外面タテハケ。胴部内面左→右のヘラ削り＋ナデ。外面スス。	
〃 － 24	SK30	弥生土器	壺	(19.0)	4.8	－	－	チャート他の粗粒砂を多く含む	内）にぶい橙 7.5YR7/4 外）にぶい橙 7.5YR6/4	口縁内面ヨコハケ。口頸部外面タテハケ。口唇ヨコハケ＋ナデ。	外面煤ける。
〃 － 25	SK30	弥生土器	壺	(24.0)	6.1	－	－	チャートの粗粒砂を多く含む	内）橙 7.5YR7/6 外）橙 5YR6/6	内外面に指頭圧痕。	外面煤ける。
〃 － 26	SK30	弥生土器	壺	－	8.3	－	6.6	チャート他の粗粒砂を多く含む	内）黄灰 2.5YR5/1 外）にぶい橙 7.5YR7/4	内面下上の削り＋ナデ。外面タテハケ。	内面底部以外は著しく煤ける。外面被熱赤変、煤ける。
〃 － 27	SK30	弥生土器	壺	－	8.3	－	(6.4)	チャートの粗粒砂を多く含む	内）暗灰 N3/ 外）にぶい橙 5YR7/3	内面ナデ。外面タテハケ。	外面被熱赤変、煤ける。
〃 － 28	SK30	弥生土器	壺	－	10.5	－	(16.4)	チャートの細・粗粒砂を多く含む	内）暗灰 N3/ 外）にぶい橙 7.5YR6/3	外面タテハケ＋ナデ。内面指整調痕。	
第32図 － 29	9層下	須恵器	壺	－	－	－	－	精土	内）灰 N6/ 外）灰 N6/	天井部内外面回ヘラナデ。	
〃 － 30	8層	須恵器	壺	－	－	－	－	細粒砂を含む	内）灰 N7/ 外）灰白 2.5Y7/1 断）灰褐 5YR6/2	口縁内外ヨコナデ。胴部内面同心円文状の当て具痕。外面は自然釉。	
〃 － 31	15層	弥生土器	甕	(17.5)	3.8	－	－	細・粗粒砂を含む	内）にぶい橙 7.5YR7/4 外）にぶい褐 7.5YR5/4	口外都拡張。頭部外面に櫛状施文体による凹線文。	搬入品。
〃 － 35	15層	弥生土器	壺	14.8	(7.9)	－	－	チャートの粗粒砂を多く含む	内）にぶい橙 7.5YR7/3 外）にぶい橙 7.5YR7/3	口縁上方に拡張。ヨコナデ。	
〃 － 33	10層	須恵器	甕	(24.0)	3.8	－	－	－	内）灰 N6/1 外）灰 N5/1 断）灰 N7/1	口縁部外面ヨコハケ＋ヨコナデ。内面ヨコナデ。	

【遺物観察表凡例】
○色調の欄の略号「外」は外面、「内」は内面、「断」は断面を表している。
○色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」による。

写真図版

調査前風景（南より。左は上岡山）

調査前風景（北より。奥は上岡山）

図版 2

SK19　検出状況

SK19　完掘状況

SK21　検出状況

SK21　完掘状況

SK3　土層断面

SK22　土層断面

SK17・18　完掘状況

SK10・11・12・14・15・16　完掘状況

石列1－1（北より）

石列1－2（北より）

石列1－3（北より）

石列1－3（西より）

石列3及び土坑検出状況

石組遺構（北より）

石組遺構（西より。写真奥）

石組遺構

図版 4

旧堤防出土状況と作業風景1

旧堤防出土状況と作業風景2

現堤防馬踏（北より。奥は上岡山）

現堤防裏法

図版 6

旧堤防裏法側全景

旧堤防　A. 南側崩落部分（北より）

旧堤防　A. 南側崩落部分（東より）

旧堤防　A. 南側崩落部分と堆積層

図版 8

現堤防と旧堤防交差部（裏法側）

旧堤防南側　裏法下部分

上岡北遺跡と周辺部（真上より）